エーテルちゃんはひとりぼっち

菓子ノ靴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

長らく更新が滞ってしまい、申し訳ありません ^ ＿ ^ ；

更新もせずに何をしていたかと申しますと、

心理描写の追加や、くどい描写の省略に始まり、

主人公の性格の微調整など、

マイナーチェンジではありますが、物語を全体的に書き直しておりました。

つきましては、

（大まかな流れはそのままですが、章立てなども変えていきたいので）

新しく書き直したお話を投稿していきたいと考えております。

現在投稿している分は、近日中にいったん削除する予定です。

まことに勝手でありますが、お付き合いくださればこれに勝る喜びはありませんｍ（＿＿）ｍ

◆　◆

「私は一人ぼっち。

物心ついてから、誰にも愛されたことがない。

この国の姫として生まれたのに、

親に嫌われ、使用人に嫌われ、

町では「変わり者の姫」で名が通る始末。

何をするにも見張りがつくし、城から外には一歩も出られない。

どうして私がこんな目に遭うんだろう？

その理由を知りたい。
――その理由を知った私は、旅に出た」

◆　◆

物語のテンポをよくするため、
本筋から外れた話は『Ｅｘｔｒａ　ｓｔｏｒｙ』としました。
読み飛ばしていただいても問題ありません。
タグも少々変更しました。

目次

Prologue
prologue ―1 魔王、蹂躙する ―― 1
prologue ―2 魔王、蹂躙する ―― 4
Chapter1
chapter1 ―1 私にとっては福音です ―― 7
chapter1 ―2 こっちに来ないで ―― 10
chapter1 ―3 ご苦労なことね ―― 15
chapter1 ―4 だって姫様が ―― 18
chapter1 ―5 言いすぎたかな ―― 23
chapter1 ―6 当然のことさ ―― 26
chapter1 ―7 え、生きてるけど？ ―― 29
chapter1 ―8 話を聞け！ ―― 32
chapter1 ―9 地獄だ… ―― 40
Chapter2
chapter2 ―1 お先真っ白 ―― 43
Chapter3
chapter3 ―1 絵になる ―― 48
chapter3 ―2 変態サディスト女 ―― 52
Extra story 酒場のウェミニア！ ―― 55
chapter3 ―3 大きな芋虫がいて ―― 59
chapter3 ―4 ああもう駄目 ―― 63
Chapter4
chapter4 ―1 犬っぽい ―― 70
Extra story ドレスぬぎぬぎ大作戦！ ―― 77

chapter 4 — 2 誰よヒルダって ―― 85
chapter 4 — 3 辺境で暮らそう ―― 95
chapter 4 — 4 私じゃない ―― 99
chapter 4 — 5 行かせてよ ―― 102

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

ｐｒｏｌｏｇｕｅ　―　１　魔王、蹂躙する

四大精霊が眠るとされる地、イシュトラル。

ミクトラン山脈により大陸は南北に二分され、北は大森林、南は大荒原によって分たれる。これら四つの区域に、四つの文明が栄えた。

風の精霊、シルフに信仰を捧げる、ウィンパーラ。

火の精霊、サラマンダーに信仰を捧げる、フレイナル。

土の精霊、ノームに信仰を捧げる、アスタール。

水の精霊、ウンディーネに信仰を捧げる、シーストス。

異なる教えは、その戒律によって互いを排斥し合う。対立はやがて世界規模の宗教戦争へと姿を変え、戦いは多くの犠牲を払いながらも苛烈さを増していった。百と余年が過ぎた頃、ウィンパーラとシーストスが休戦協定を締結し、これに対するフレイナルとアスタールの連合軍が発足。南の荒原にて行われた両同盟軍の合戦は、後に「エッケフェルノの戦い」と呼ばれた。

百年続いた宗教戦争の、これが最後の戦いである。

彼らにとって、幕引きは天災そのものだったと言えよう。

突如、大荒原の空を埋め尽くす、おぞましい竜の群れ――悪夢のような力によって、戦場は一面が血の海と化した。まさに瞬く間の出来事だった。

魔王の登場だ。

四つの文明が魔王に平伏し、国境は意味をなさなくなる。

魔王は桁外れの軍を率いていた。魔法、武器、兵士、どれもが人間のそれを遥かに凌駕していた。ならば人類に希望はないのかというと、そうではない。

ここは四大精霊が眠るとされる地、イシュトラル。

戦いが始まると、彼らが信仰する四大精霊は降臨する。四大精霊は、かつてのウィンパーラ、フレイナル、アスタール、シーストスから四人の若者を選んで、魔を討ち滅ぼす力を授けた。かの精霊に選ば

れし四人の者たちを、人々は憧憬の念を込めて「勇者」と呼んだ。
勇者たちは驚くほどに強く、魔王の配下を次々討ちとっていった。間もなくして人類連合軍が発足する。勇者に導かれるまま、連合軍は魔王軍へと攻勢をかけた。
迫りくる人間の大軍勢に、魔王は籠城戦を強いられた。

灰色の空の下、テカトル火山の裾（すそ）を包囲するように、かつてない規模の大軍が展開されていた。約五〇万からなる戦列の顔ぶれは、年をとった農民であったり、年の足らない子どもであったり、妙齢の婦女子であったりもした。ここにいる誰もが、その眼差しに敵を射殺さんばかりの憎悪を宿していた。
父を殺された、息子を殺された、夫を殺された、恋人を殺された――憎しみは人の数だけある。
火口にそびえたつ異様な建造物――魔王城。その周囲には、魔獣の死骸が折り重なるように散らばっている。
城内。
巨大な両開きの扉を押し開けて、玉座の間に、駆け込んでくる者がいた。
それは真紅のドレスに身を包んだ美少女だ。燃え立つ焔（ほむら）のように赤い髪が、背中まで落ち、動きに合わせて揺れる。小悪魔を思わせる小さな黒い角が二本、つややかな髪を割って、捻じれながら前に突き出している。ドレスと同じ色の瞳は、玉座にかけた主人の姿を映すと、安堵の色を灯したが、またすぐに不安に獲りつかれた。
「魔王様！　ご無事で何よりです！」
赤いドレスの少女はひどく動揺していた。
「人間どもは群れを成し、火山の麓（ふもと）を包囲しています。……ここは一度引くべきかと。私のドラゴンをお使いいただければ問題なく突破できるはずです」
「うむ――」
魔王と呼ばれた者が何かを言いかけたその時、重厚な鉄の扉に、無数の線が網目状に走った。そして一瞬の後、轟音を立てながら、鉄の

ブロックが床にぶちまけられる。
切り刻まれた扉の向こうには、双剣を構えた銀髪の青年が立っていた。その後ろには三人の女たちが並び立つ。
全身を灼熱感が襲い、赤い少女は、自分の身に起きたことを理解した。
「ま……おう……さま……お逃げ……ください……」
玉座を見上げる瞳から、涙のつぶが散った。少女は背中から血を噴き上げながら、ゆっくりと地面に倒れこんだ。
その細い体をまたいだ四人の者たちは、前のみを見据え歩きだす。部屋の中ほどまで進むと、立ち止まりそれぞれの武器を持ちなおす。
「よくぞ来た。四大精霊に選ばれし勇者たちよ」
背もたれの高い玉座から、地面を震わすような重低音が響く。装飾のちりばめられた玉座に、脚を組んで座しているのは、目算でも背丈三メートルはあろう漆黒の鎧だった。細部の作りこみは見事と言うよりほかなく、黒曜石のような輝きを放つ総身鎧（フルプレート）の節々から、禍々しい闇のオーラが漏れ出ていた。
「お前の悪徳もここで終わりだ、魔王！」
「……怒りを鎮めよ。そして話をしよう。私と手を組まないか？」
「何だと？」
「手を組まないかと言ったのだ、選ばれし者たちよ」
「ふざけるなァァ！」
「ふざけないで！」
「みんな！　耳を貸してはいけません！」
「魔王……あなたは、自分がどれだけ多くの人を殺したか、理解しているの？」
四つの鋭い眼光を一身に浴びた魔王は、肩を揺（ゆ）する素振りをした。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ　―　２　魔王、蹂躙する

正直のところ、勇者たちはこの予想外の対応に戸惑っていた。
事実上、魔王軍は崩壊したようなものだ。後を残すは魔王ただ一人。では、居直っているのでなければ、奴はなぜこうも悠長に構えていられる。定石を踏むのなら、このまま一斉に斬りかかるべきだ。しかし、胸の内に芽生えたわずかな疑念が、あと一歩踏み込むのを躊躇させていた。黒い巨躯がやおら玉座から立ち上がると、彼らの硬直は解ける。
「うおおおおオオ！」
弾かれたように先陣を切ったのは、銀髪の青年リオンだ。
パルチザンを構えたセシルと、グレートソードを担いだフィオナが彼に続く。それに合わせてリリスは数歩下がって身構えると、首に提げたタリスマンを両手で包む。
そして祈るように瞑目する――。
〈大地の恵歌（ラヴァ・カンターレ）〉
前衛のリオンたちを、琥珀色の光が包む。精霊の加護による〈上位身体強化（ハイ・フィジカル・エンチャント）〉である。仲間の助勢を得たリオンたちは、勢いを増して階段を駆け上った。彼我の距離が縮まるに連れて、魔王の威容が相対的に大きくなる。しかし先ほど抱いた不安はもはやなかった。恐れることはない。現にこうして魔王軍を壊滅に追い込んだのは、紛れもなく自分たちなのだから。
後はただ、この手に託された力を振えばいい。打ち込めばいい。何も恐れることはない。
リオンの双剣が、凄まじい風の奔流を巻き起こしながら振り抜かれた。
その剣身に纏った風は、先ほどの扉を細切れにしたときの比ではない。
まだ階段を上りきってなかった二人が、勝ちどきを上げようとした、
――その時。

二人の間を、何かが通りすぎた。

「……え？」

どちらからともなく零れでた声……。

今のは何だ？

後ろを振り返って、確認する必要はない。

ついさっきまで視界に映っていたリオンの背中が、どこにもないからだ。

リオンが何をされたのかも、魔王の手つきを見れば分かった。

――でこぴん。

フィオナと、セシルは、全身が凍りついたようだった。

仲間の安否を確認しようとするが、後ろを振り返ることができない。

本能が、魔王から視線を外すことを拒んでいる。

冷たい汗が頬を流れる。

このなものには勝てない……。

漆黒の鎧は依然として動かない。なぜかかって来ないのかとでも問いたげに。

「まずいわね。強すぎる……」

「強すぎるわよ!! こんなの反則じゃ……ひい!?」

魔王に視線を向けられたフィオナは、怯えるあまりグレートソードを落とした。精霊の剣が――勇者の誇りが――空しい音を響かせながら階段の下まで滑り落ちる。

次いで視線を向けられたのはセシルだ。フィオナの失態を目にしていた彼女は、震える手でパルチザンを握りしめ、落とすことはなかったが、その代わりに股間に大きな染みを作った。

「そんな……そんな……。私たちは負けるのですか？　人間は滅びる

のですか？　あああぁ……大いなる元素の精霊よ、我らを救いたまえ……魔王は、魔王は強すぎました……！」

消え入りそうな声で祈るのは、リリスだ。

気を失ったリオンの体を強く抱きしめながら、リリスはついに敵前にもかかわらず、泣きじゃくり始めた。

――まだ何もしていないのにこれである。

魔王は〈魔王の一撃（デコピン）〉からの一連の出来事を、心底、理解しかねていた。

威圧したつもりなんて毛頭なかったのに。

――話はここで一旦終わる。

この物語の主人公は魔王だ。

この物語の主人公は、魔王だ。

これは、

魔王がどのようにして誕生したのか――

魔王はどうして人類を滅ぼそうとしたのか――

そんなちょっとした歴史のようなものを紐解いていく、

――そういう物語だ。

Ｃｈａｐｔｅｒ１　ｃｈａｐｔｅｒ　１　―　１　私にとっては福音です

イルティア公国の首都リハネスでは、都心から少し外れた小高い丘の上にユスティヘル公爵の居城を置いている。人口およそ十七万人。首都としては小規模なものだが、中央行政機関による治安維持が隅々まで行き届いた良い町だ。往来ががあるなら裏通りにも石畳を敷き、大通りにいたっては歩行者と馬車の進路が分けられている。領主から民への配慮としては他の公国に類を見ないものだ。それゆえに町民の満足度は高く、町はいつも活気に満ち溢れていた。今このとき丘の上から見下ろせる景色に人の営みがないのは、ひとえに早朝だからだ。起床には早すぎる。

少女にとってもそれは例外じゃない。

普段ならまだぐっすり眠っている時間だ。しかし、今日だけは例外だ。少女は寝室のカーテンの隙間から顔を半分のぞかせて、静まりかえった町並みを眺めていた。興味なげに欠伸（あくび）を一つし、また思い出したように中庭の方をうかがう。

門の前に停められた馬車には、先ほどから特に変わった様子はない。踏み台のかたわらに控えた従者は、誰が見ているわけでもないのに――一人こっそり見ているが――姿勢を楽にしようとする素振りもない。そこにやって来るだろう人物の、身分の高さを物語っている。

「ふぁぁぁあ……」

少女は大きな欠伸をするために、一度カーテンから離れた。ただし、片手の指をチョキにしてカーテンに隙間を作るのを忘れない。

「遅いなあ……」

物憂げに呟くと、また大口を開けて欠伸をした。

少女は、エーテル。

正しくは、エーテル・アルレット・ベル・ルネッタ・ユスティヘル。
エーテルはこの長ったらしい名にまるで実感というものがない。それは公爵家の娘として――つまりはこの国の姫としての自覚を持たないということ。仮に家族の前でこれを口にしたとしても、咎められることはないだろう。
もう何度目か分からない欠伸を噛み殺そうとしたとき、公族の正装に身を包んだ初老の男が、複数の側仕(そばづか)えを伴いやってきた。
その側仕えの中に、待ち望んでいた姿を目にする。
カーテンを全開にして、エーテルは思わず窓台に乗り出した。
(やった、あいつもいる!)
正装した初老の男――ユスティヘル公爵の後ろには、この城でもっとも警戒すべき女がいる。もともとは王国の近衛騎士団に属していたが、その頃からすでに飛び抜けた技量の持ち主であったため、近隣の公国にその名を轟かせていた――そんな女傑だ。それが所以あって現在ではユスティヘル家の護衛官を務めているのだ。エーテルからすればまったくもって迷惑な話だ。
――今日は、数年に一度の六国議会の日だ。五つの公国の公王が、王国の召集に応じる形で集い、国家間の情勢や今後の方策について論議する。
少女にとってこれが意味するのは、父の終日不在である。
そのうえ護衛の女も父について王都へ行ってくれるという。まさに福音だ。護衛の女が不在の場合とそうでない場合では、成功の確率がまったく異なってくる。
またとないチャンスが到来した。
逸(はや)る気持ちを抑えきれず窓台に乗り出していたエーテルは、にわかに過ちを悟って、カーテンを閉じようとした――。
その時、護衛の女と目が合った。
(やば、見られた!?)
反射的に飛びのいて、呼吸をしないように口に手をあてる。
(……いや、この窓は、外からは中が見えないはず……)
ところが相手は凄腕の騎士で、そして超級の魔法士だ。自分の常識

に当てはまらない可能性だって大いにある。
そっと窓から顔を出して、覗いてみた。
一行はちょうど馬車に乗り込むところだった。踏み台に足をかける護衛の女の姿も見える。ただの思い過ごしだったようだ。
エーテルは心の底から安堵した。

ｃｈａｐｔｅｒ　１　―　２　こっちに来ないで

丘の小道を下っていった馬車を、見えなくなるまで見送ってから、行動を開始する。

――パジャマを脱いで、鏡に映った下着姿を眺める。

痩せた体つき。十七の娘にしては、やや長身。

全体のバランスから見て大きめの胸は、ひそかな自慢だ。

腰まで届く長い髪は、宇宙を閉じ込めたような薄い紫色。

瞳も、夜空を卵型に圧縮したような青紫色。

一つ深呼吸をしてから、室内着のドレスに着替え始める。エーテルは生まれてこの方、一度も外出したことがない。だからクローゼットには室内着しか入っていない。

ドレスを着ると、二回目の深呼吸をする。

「よし……」

――窓台に膝をつく。そして窓を押し開ける。朝の冷たい風が体にかかる。

ついそのまま下を見てしまった。地面がかなり遠い。ここは六階だ。落ちたら怪我では済まない。浅く息を吐いて、もう一度、だが決然と呟く。

「よし」

スカートをたくし上げると、片足をそろーりと空中に伸ばす。

つま先がなんとか外壁の出っ張りに乗った。だけど問題はこの後だ。この出っ張りの上に、全体重を乗せなければならない。三度目の深呼吸をして、エーテルは軸足で窓台を蹴った。自分のしたことを後悔した時には、もう体は宙に浮いていた。外壁の出っ張りに無事、着地を果たすと、全身からどっと汗が噴き出した。

「あぁ、だめかも……動けないかもぉ……」

極度の緊張から、その場でしばらく石化したエーテルは、四度目の深呼吸をする。そして、壁沿いを伝って歩きだす。半歩ずつ、なるべく下を見ないように、ゆっくりと……。

中庭では、猫車を押した庭師が徘徊していた。父の出立と入れ替わ

りに来るというのは知っていたが、予想よりもだいぶ早い。庭師を見つけた時は歯噛みしたが、こちらに気づく気配はなかった。あらかじめ城壁に最も色の近いドレスを選んでおいたのが、功を奏したようだ。

とにかく緊張から解放されたいという願いが、高所への恐怖を凌駕し、足を速めさせた。結果、エーテルは首尾良く目的の窓へと辿り着いていた。そして、自室のものと同じ構造の窓を前にして、ついさっき通った恐ろしい試練の再現を、覚悟していた。

執務机の背後のカーテンに、桜色の芽がひょっこり頭を出す。

その芽が伸びあがり指になると、カーテンに細い隙間を作る。室内が無人であることを確認すると、カーテンの裾(すそ)から、白い生足がすっと二本伸びた。

エーテルは苦い顔をした。

ここに入るのは初めてだが、一般的な書斎に比べると広い造りだ。大きな書棚と姿見を置いていても、まるで手狭には感じない。この中から、目当ての物を見つけなければならないのだ。

時間は有限だ。

早速、手当たり次第に物色しはじめる。

一番怪しいのは、この執務机だ。だけどもし本棚の中――ページの間にでも挟まれていたら、探し当てるのは限りなく不可能に近いだろう。いや、机に隠されているにしても、引き出しは十四個もある。どちらにしろ一筋縄ではいきそうもない。

エーテルは机の中を調べていった。

この引き出しのどれかにあれが隠されていると、信じるしかない。

肌寒い季節にもかかわらず、額には汗が滲んでいる。引き出しの中身をひっくり返し、検分して元の位置に戻す。その繰り返しは、エーテルの細腕にはなかなかの重労働だった。だがいつ誰がやって来るか分からない状況下で、部屋を散らかす訳にもいかなかった。

引き出しが残り二つになったところで、居ても立っても居られなくなる。

そもそも、あれが書斎にあるという保証はどこにもない。
父が肌身離さず持っているのかもしれないし、護衛の女に管理を任せているのかもしれない。いずれも、もしそうだとしたら、丸一年、考えに考えた計画はこれで終わりだ。
神にも祈る気持ちで、次の引き出しを開けて、中身を検分していく。
――ない。
（……ないの？）
エーテルは絶望の芽を摘みとって、最後の希望である引き出しを、開ける。
「誰かいるんですか？」
「ひあっ!?」
心臓が飛び跳ねた。ような気がした。
――ノックの音が書斎に響く。
「入室いたします」
扉が動く。
（ど、ど、どうしよう！　どうしよう!?）
とっさに引き出しを戻したまでは良かった。
その次にすべきことが思いつかない。
何も考えずしゃがみこみ、場当たり的に机の下に飛び込んだ。
足音が近づいてくる。
（な、なんでこっちに来るのよっ!?）
そもそも、一介のメイドが父の書斎に一体何の用があるのか、エーテルには理解できない。
入室理由が清掃などであったら、最悪だ。
足音はどんどん大きくなる。
いや、入室の理由を問うなら、たぶん原因を作ったのは自分だ。メイドは扉をノックする前に誰何していた。しかし、だとしたら、こちらに近づいてくる理由は……？
突然、黒い靴を履いた両足が、視界いっぱいに現れた。
（わきゃぁぁぁぁぁ!?）
悲鳴を上げそうになる口を、必死に手で押さえる。

心臓が早鐘を打っている。
（うわああ、まずいって。こんなとこで見つかったら言い訳できない！）
最善策は、おそらく実力行使だ。
相手は一介のメイド、魔法の素養などない。対するエーテルは全属性を使いこなす上級魔法士だ。ある憎たらしい魔法道具（マジック・アイテム）のせいで、魔法を行使すればたちまち居場所を特定されてしまう身ではあるが、このまま大人しく捕まるよりはいい。メイドを眠らせて記憶を曖昧にしたほうが後にいろいろと証言されなくて済む分、言い訳も立ちやすい。
机の下から飛び出ようとした時、ふいに黒い靴のつま先がそっぽを向いた。
（――うっ？）
ギギギィ――バタンッ……。
（なに？　あ！　窓っ!?　窓を閉めにきたんだ！　あっ……危なかった……！）
メイドが立ち去っていく音を聞きながら、膝を抱えたまま、エーテルは長い溜息をついた。
椅子に手をかけて立ち上がると、軽く眩暈（めまい）がした。
……最後の、引き出しを開く。
中身は書類の山だった。
落胆しながらも検分していく。床の上に書類を取り出そうと持ち上げて、違和感を覚えた。
書類の間に何か挟まっている……。
抜き取ってみると、それは赤いカバーの本だった。表紙には何の記載もない。
見るからに怪しい……。
背表紙をつまんで振ってみる。
――くすんだ銀色の鍵（かぎ）が床に落ちる。
「……ああっ！」
エーテルはほぼ無意識でガッツポーズを決めていた。諦めかけて

いた分、喜びは大かった。
書類の山に、赤い本を挟んで、引き出しの中に戻す。
これで〝山〟を一つ越えた。
厳密にはここから自室に戻るまでが〝山〟なのだが、右手に鍵を握りしめていると、行きしなよりずいぶん、気が楽だった。

chapter 1 ― 3 ご苦労なことね

城壁を伝って自室に戻ると、汚れたドレスを脱ぎ捨てて、下着姿になった。

汗をかいたので本音を言えば下着も変えたいところだったが、洗濯物が増えすぎたら怪しまれる。不承不承パジャマに袖を通して、ベッドに寝転んだ。

できれば寝ておこうと思ったが、興奮しているせいか寝付けなかった。

ぼうっと天井を眺めて。無聊を慰める。

時折、手にした鍵をかざして、微笑んでみたりもした。

そうやって数時間が無為に過ぎたかという時、ノックの音が部屋にこだました。ノックの主は返事も待たずに、ドアの鍵を外しだす。

エーテルは、ノックを聞いた瞬間、ベッドに潜り込んで目をつむっている。彼女に早起きの習慣はないので、寝たふりをしておくのが無難なのだ。

「おはようございます」

毎朝、決まった時間に決まった台詞を吐く――これもユスティヘル家に仕えるメイドの仕事の一つだ。

「……ふぁ……おはよ……」

大きく伸びをしてみせてから、起き出して、さっきとは別のドレスに袖を通す。

ベッドルームを出て、回廊のレッドカーペットの上を歩いていく。

後ろには二人のメイドが続く。城内におけるエーテルの行動は、就寝中を除いて、常に監視されている。立ち入りを禁じられている部屋も少なくはない。

三階まで吹き抜けになった食堂に着くと、食卓の、朝食が準備されている席にかける。簡単なサラダと、パン、あとはボイルドエッグ。肉類がないことに不満を覚えつつも、静かに口へと運んでいく。温かい紅茶を胃に流し込んで人心地つく。

（ごちそうさまでした……）

ナフキンで口を軽く拭って、立ち上がる。
「着替えてアトリエに行くわ。その後のことは……んー、その時に考えるわ」
椅子を戻しにかかるメイドに、いつものように日中の過ごし方を伝える。何をするにも付き添いが必要なため、何をするにも予定を伝えなければならない。
一瞬、メイドが不服そうに眉をひそめた。エーテルはそれを見逃さず、期待通りの反応に、内心でにやつく。
計画は今のところ順調に進んでいる。
自室に戻ろうと歩きだしたエーテルは、思いがけない人物に出くわした。同じ城に住んでいるのに久しぶりに見る顔だ。
「これは、お母様。おはようございます。エーテルはお先に朝食をいただいておりました」
「そ、そう……」
「お母様も、どうぞ有意義な一日をお過ごしください。それでは失礼いたします」
「ええ。じゃあ……」
自分とまるで似ていない、湿地帯の魔女のような風貌の王妃に、恭しくお辞儀をして、エーテルは食堂を出た。廊下を十歩も進めば、後方からヒステリックな声が響いてくる。
「どうしてあの子をここにあげたの！」
慌てた使用人が何か言葉を返す。
「――そんなのは分かってるのよ！　私が言ってるのは、私があの子を見なくて済むように、あなたたちが配慮しなさいってことでしょう!?　使えないわねぇ！　あなたもう明日から来なくていいわよ！」
すぐさま平謝りする使用人の叫びが聞こえる。
――付き添いの目に留まらないように、エーテルは薄ら笑いを浮かべていた。
母の態度にも慣れっ子だ。むしろ自分を避けて今まで生活をしてきたなら、それはなんともご苦労なことだ。言ってくれれば鉢合わせないように配慮くらいはしてやれたのに。

そんなことを考えながら、エーテルは食堂を後にした。

chapter 1 ― 4 だって姫様が

中庭の、納屋を改造したアトリエは、隙間風はあるわ、底冷えはするわで、お世辞にも居心地が良い場所とは言えない。

ましてや業務内容を考えれば、拷問(ごうもん)にすら近いものがある。

新米メイドのクラリッサは、パレットを持ったお姫様の背中を眺めて、何度も、何度も、心の中に溜息を落としていた。

(あぁもう早く終わってくれないかなぁ……)

始まってから一時間くらい経っただろうか。先輩の話によれば、まだまだ先は長い。

ユスティヘル家のメイドの業務は、清掃や接客や事務関係の雑務まで、多岐に及ぶ。中でもエーテル姫の監視が、実に奇怪なことだが、メイドたちに充てられた最重要・最優先の役割であるらしい。ただ重要だからと言って、やり甲斐があるわけではない。むしろその逆だ。その日の監視業務に回されたメイドは、貧乏くじを引いたも同然だった。

そんな人気のない監視業務の中で、最も嫌われているのが、このアトリエだ。アトリエには、半日以上詰めるというパターンも珍しくなく、貧血で倒れるメイドが続出している。メイドたちの間で「地獄のアトリエ」と囁かれるこの仕事は、完全に押し付け合いの様相を呈していた。

つまりクラリッサのような新入りの、立場の弱いメイドに回ってくるのだ。

(寒いよぉ……お城に入りたいよぉ……)

だいたい、描いている絵が不気味なのだ。

何をモデルにしているのかは知らないが、一枚たりとも理解できる絵はない。見たこともない生物。おそらく天使なのだろう女性や、見るもおぞましい悪魔たち。特に悪魔の絵が多い。

――なんて気味の悪い女だ。

一国の姫を、そう思うのに、クラリッサはなんの憚(はばか)りもなかった。

ユスティヘル家に仕えはじめて数ヶ月。エーテル姫が、公爵夫妻と

全使用人から疎まれているということは暗黙のうちに了解している。しかし城に幽閉するのではなく、政略結婚の道具にするなり、他に使い道があるように思えるが、一介の町民であるクラリッサには及びも付かない世界があるのだろう。

今、エーテルが取りかかっている絵は肖像画を思わせるタッチだ。だがやはりモデルになる物はない。地獄の焔(ほのお)もかくやという赤髪の、美しい少女の絵である。ただよく見ると、こめかみに黒い角が生えている。これも「悪魔」ということなのだろう。

(……こんなのばっか描いてるから、みんなから気味悪がられるんでしょ)

ふと、エーテルの細い肩がわなわなと震えていることに気がついた。

「あー！　もうっ！」

突然の怒鳴り声に、心臓がどきりと跳ねた。

「は、はい!?」

後ろからこっそり絵を覗き込んでいたクラリッサは、冷や水をかけられたウサギのように、その場で飛び跳ねた。エーテルが振り返る前に、直立の姿勢に戻る。

「……いかがなさいましたか？」

「気が散る！」

また鼓動がうるさくなった。こっそり覗き見していたことを言っているのなら、少々まずい。

「……あの、なにかお気に障りましたでしょうか？」

「息遣いとか、衣擦れの音とか、耳障りなの！」

心配は杞憂に終わった。しかしながら、まったく別の難癖を吹っかけられてしまった。どう対処すればよいのか。どの職種でも、新人というのはマニュアル外の事態に弱いものだ。

「集中できないから、外で待ってなさい！」

そう命じられ、マニュアル人間のクラリッサは息を吹き返した。

「申し訳ありません、姫様。公爵様より護衛の任は常に徹底するように仰せ付かっておりますので……」

「護衛？　監視の間違いでしょ？　あのね、ここには窓もないし、あなたが出入口を塞いでてくれれば逃げるなんてできっこないんだから」
「申し訳ありません、決まりですので……」
「あなた新人り？」
「はい、そうですが」
「これ以上口答えするならお義父様に言いつけて、クビにするわよ」
「えっ!?」
　クラリッサは急に背中が寒くなった。
「いい？　あなたたちの仕事は私が逃げ出さないように見張ることよ。一つ覚えの猿みたいにただ見てればいいってものじゃないの。逃げ出せないようにすれば、別に見ている必要なんてないの。そんなことも分からないかしら？」
「で……ですが」
「ふぅん、口答えするの？　さっき私なんて言った？」
「も、申し訳ございません！」
　そくざに頭を垂れて許しを請う。
　そんなクラリッサの視界に、純白のストッキングに包まれた足が映り込む。驚いて顔を上げると、エーテルがぐっと体を寄せてくる。間近にすると、人形のように整った顔だ。同じ年頃の子女として、クラリッサはにわかに羞恥心を抱いていた。
「私は！　何て！　言ったっ！」
「くっ……ク、クビにすると！　お、おっしゃいました……」
「へえ？　クビにされたいの？　いいわよ、明日にでも――」
「い、イヤです!!　お願いします！　故郷に病気がちの母がいて、弟もまだ小さく……」
「黙りなさい！　あなたの身の上話なんて聞いてないわ！」
「う……ぅ……ごめんなさいぃ……」
　視界が滲み始める。
　同情を誘うつもりなんてなかった。だけど、他人の不幸など歯牙にもかけないという態度を見せつけられ、なぜだかどうしようもない無力感に襲われた。

涙が止まらない。次から次へと溢れてくる。
言ったことは真実だ。病床の母がいて、弟もまだ幼い。父は小さな商店を営んでいるけれど、家族を養っていくだけの稼ぎはない。だったら自分が稼ぎ頭になるんだと、いささか短絡的ではあるが、ここリハネスに出稼ぎにやってきたのだ。当初は、持ち前の容姿を活かして娼館で働こうと本気で考えていた。もちろん両親には内緒だが、他の仕事よりも高給をもらえるとあって、世間知らずの娘には現実的な方法に思えた。事実、職業紹介所の掲示板でメイド募集の張り紙を目にしていなければ――玉砕覚悟で応募していなければ――何十人もの中から運良く採用されていなければ――今頃は、娼館にいたかもしれない。
何があってもこの幸運を手放したくはない。
クラリッサの心はすでに折れていた。
「わかったなら行きなさい」
「……はぃ」
鼻をすすり目を擦りながら、お辞儀をすると、アトリエを出た。
出入り口の前に、泣きながら立つ。
庭師の男が心配そうにこちらを見ていたが、使用人の優劣の意識してか、声をかけてくることはなかった。

しばらく泣いてすっきりすると、クラリッサは、何も泣くことではなかっただろうと思い始めた。得てしてそんなものだ。せっかく誉れ高いユスティヘル家の使用人になれたのだ、神の加護を信じなくてどうする。こんなことで挫けてどうする。気持ちを新たにすべく、頬をぱんぱんと叩いた。そんなクラリッサの背中に、訝しげな声がかけられる。
「……クラリッサ？　そこで何をしてるの？」
「あ、ニコラさん。実は……」
振り返りざまにしようとした説明を、ニコラが強い口調で遮った。
「あなたまさか！　エーテル姫の監……護衛じゃなかった!?」
「うぇ……あ、はい、そうですよ……？」

「姫は今どこ!?」
先輩メイドの鋭い剣幕に、背筋が寒くなる。
「アトリエの中にいるはずです」
「はずじゃ駄目なのよ！　どうして側から離れたの!?」
「そ、それは、姫様が、集中できないからって……」
「もういい！　どいて！」
再び泣きそうになったクラリッサを押しのけて、ニコラがドアを叩く。
「姫様！　ニコラです。入室してもよろしいですか？」
返事はない。
「失礼いたします。姫さ――」
開いたドアのノブを握ったまま動かないニコラを見て、クラリッサは全身から冷や汗が吹き出るのを感じた。

chapter 1 ― 5 言いすぎたかな

壁の板を剥がして中庭に出た。

植込みの死角を上手く使うことで、鬼門になると警戒していた庭師の目もなんとか欺けた。手近な窓から一階の回廊に侵入し、メイドたちと出くわさないよう、物音に耳を澄ませながら進んでいく。ここまで来れば作戦の成功は目前だ。今さら魔法を使うわけにはいかない。例の憎き魔法道具（マジック・アイテム）のせいで、一度魔法を使えばどこに逃げようが特定されてしまう破目になる。

目的の場所に辿り着くまで、魔法は使えない。

東棟の、現在は使われていない廊下に入ると、空気が一変して埃っぽくなった。清掃はここまで行き届いていないらしい。今のエーテルにとっては好都合だ。

廊下に面する扉を虱潰しに開けていく。いずれも、簡素なベッドと、木の箱があるだけの、鬱陶しい部屋だ。おそらく噂に聞いていた、昔いたという使用人たちの住居だろう。

――今から十一年前。ユスティヘル家先代当主と、その夫人が、行楽に出かけた先で魔物に襲われるという事故があったらしい。連れていた使用人も大勢死んだ。

その時に亡くなった先代当主夫妻が、エーテルの実の両親である。

現当主は、先代当主の弟――エーテルの叔父に当たる人物だ。

（うぎゃっ、蜘蛛の巣……）

なにはともあれ、綺麗好きなエーテルにここはいささか厳しい環境であった。

それよりも――と、エーテルは考える。

（……やりすぎた）

泣かすつもりはなかった。

名前も知らないけど、小動物みたいな愛くるしい容姿をしていたあのメイド……自分の絵に興味を示してくれていた。どちらかと言えば好印象なメイドだった。

（謝ったら仲直りできるかなぁ……？）

そうしたら、友達になってくれるだろうか――エーテルは考える。最近読んだ本のなかに、貴族の娘と、庶民の娘の、友情を描いた物語があった。ある日、偶然出会った少女らは、すぐに打ち解ける。しかし身分の違いから親の反対に遭い、次第に引き離されていく。そのうちすれ違いになって、喧嘩してしまうのだけど、お互いの思いの丈をぶつけ合った後はより硬い友情で結ばれる。オチは、家出して、遠出――少女らは旅と呼んでいた――するというなんとも有耶無耶なもので、あまり好みではなかったが。

喧嘩　↓　仲直り　↓　仲良し

あの本の語るところによれば、これこそが友達作りの黄金式だ。

この計画の次にすることを、エーテルは心に決める。――友情大作戦である。

それにしても、アトリエからの脱出は、監視の目を振り切らなければならない最難関だった。それが拍子抜けするほどスムーズに達成されてしまった。

無論、運任せというわけではない。アトリエに付き添うのをメイドたちは極端に嫌っており、新入りに押しつける傾向が強かった。そして新人りであれば言いくるめられる可能性は高い。さっきのやりとりにしても、父に言いつけてクビにするなどと脅したが、長く務めた者ならばエーテルにそんな権限がないことくらい看破しただろう。

ただ、これらは希望的観測に過ぎない。

問題なく事を運べたのは、やはり幸運と言うべきだ。

心にわだかまった罪悪感も払拭されたところで、エーテルは目先の作業に集中した。窮屈な廊下だが、扉の数は両手の指で数えられない。さらには立て付けが悪く、開けるのに苦労する扉が少なからずある。これもやはり骨の折れる作業だ。使用人の出入りがないことが救いとはいえ、迅速に済ませてしまうべきだろう。考え事をしている暇などないのだ。

一際（ひときわ）立て付けの悪い扉を、なかばタックルする形でこじ開けた。

そして、地下へと下りる階段を、目の当たりにした。

口内の唾液を飲み込む――。

真っ暗――。

ここから先は手明かりなしでは進めない。もちろん持参しているが……。

ドレスの胸もとからペンダントを取り出すと、先端のブルーオーブが光を放ち、闇を払う。不朽魔法光（エターナル・ライト）と呼ばれる魔法道具（マジック・アイテム）の一種だ。外気に触れていると永続的に光を放つ。魔鉱物学の授業の際に、家庭教師の目を盗んでくすねておいた物だ。適当なところに収納しておけば発光しないため隠し通すのは容易（たやす）かった。それに自身のマナを使用しないので、例の魔法道具（マジック・アイテム）で居場所を特定される心配がない。

エーテルが喉を鳴らしたのは――単に暗がりが怖かったからだ。

ペンダントを前に突き出して、極力視界を広くしながら進む。一段一段を両足で踏みながら、下りていく。

階段はらせん状に続いていて、先を見通せないのがまた恐怖を煽る。下に行けば行くほど肌寒さが増していき、それに伴い鼓動も早くなった。壁には燭台が付いているが、蝋燭がない。さっきよりも一層闇が深くなっている気がする。

（ど、どこまで下りるの……）

分からない。地の果てまで下りていくのかもしれないし、歩くのが鈍（のろ）すぎるのかもしれない。エーテルは左の壁に、恋人にすがりつくように寄りかかりながら、階段を下りていった。

chapter 1 ― 6 当然のことさ

階段を下りきった踊り場にある木製の大扉には、鍵がかけられていた。

その鍵は入手済みだ。

鍵が鍵穴に拒絶されることなく刺さって、抵抗なく回ると、ほっと胸を撫でおろした。

一呼吸の間をおいてから扉を押し開ける。

この部屋の正体を、エーテルは知っている。

一年前。

城の中庭で、薬草からポーションを精製する方法を学んでいたとき、家庭教師に気づかれないよう、さりげなく別の魔法を使って、父の書斎を盗聴した。同じ悪戯(いたずら)を過去再三に渡って実行しているが――発覚して懲罰房行きなったことも数回――ほぼすべて不発に終わっていた。メイドの愚痴だったり、誰もいない場所を盗聴してしまったり、義母の繰り言だったり。強いて実りある情報と言えば、メイド全員から嫌われているということが分かったくらいか。

しかし、あの時は違った。

「あいつには気づかれるな…」「絶対にあいつを入れてはならないぞ…」「東棟の一階廊下…」「地下室の書物庫…」「これが他の公爵どもに知られたら私は破滅だ…」

話し相手が誰かまでは分からなかった。

だがエーテルの心には火が付いた。

何度も出てきた「あいつ」というのは、多分エーテルのことだろう。

あの不敵な男が、何かをひた隠しにしている。その秘密から自分を遠ざけようとしている。

それを「知りたい」と思うのは当然のことだ。

オーブの蒼い光が、庫内をほのかに照らした。肌寒さは書物庫というよりワイン庫のそれだ。そして想像以上に奥行きがあり、大きな机がいくつも置かれている。かつては図書室として解放されていたのだろうか。天井まで届かんばかりの本棚が平行に並んでいて、両側に

通路が出来ている。どの棚にもぎっしりと書物が詰め込まれており、目ぼしいものを探し当てるのには苦労しそうだ。
ライトを各棚にかざしていき、流れ作業で背表紙をチェックしていく。大抵こういうのは種別ごとに棚を分けるものだ。そう当たりを付けて、気になる情報をひたすらに探す。
時間は無限ではないが、余裕はある。
エーテルは、自分が逃げ出したことが表沙汰にならないなど、虫の良いことは考えていない。エーテルの脱走を知った使用人たちが、じきに屋敷中を右往左往しだすだろうと、初めから承知している。ただ、彼らが頼みの綱にしているあの魔法道具（マジック・アイテム）は、今回ばかりはガラクタだ。エーテルの残留マナはどこにもない。まさか、よりにもよって、こんな地下室に潜んでいるとは思うまいし、そもそも、この書物庫の存在を使用人が知っているのかも微妙だ。そしてなにより、警戒すべき護衛の女はいない。アトリエの件がばれても、地下室の件がばれなければ問題ないのだ。懲罰房行きは確定しているが、なにも殺されはしないだろう。
間もなくして閲覧禁止の書物がまとめられている棚を見つけた。
エーテルの目に留まったのはほとんどが家伝の書だった。
秘薬のレシピ。
一子相伝の魔書。
ユスティヘル家史書。
大魔導士叙事詩の考察。
――重ねて持つと、これだけでも相当な重みだ。
手首の筋が悲鳴を上げている。そのまま抱えて机に置いた。どさりと音を立てて本が机に着地し、かなりの量の埃がオーブの光を乱反射させる。
「馬鹿だな、私。これくらい予想できたのに……。掃除道具、持ってくればよかった……」
本の上にも、棚の上にも――床も、椅子も、机も――どこもかしこも灰色の雪が積もっている。呼吸器官を痛めてしまいそうだ。
ハンカチでせめて座面の埃を拭（ぬぐ）うと、エーテルは椅子に浅くかけ

た。
ペンダントのオーブを首から提(さ)げて、最も興味をそそられた一冊の本を持ち上げる。
公爵家、家伝の史書たるユスティヘル一族史書だ。
小口についた埃を叩(はた)き落とす。
高揚感に包まれながら、その表紙をめくる……。

chapter 1 ― 7 え、生きてるけど？

――世界樹神話。

天と地と海のない暗黒の空間に、女神エモニがいた。女神エモニは、虚無の深淵に「神の園」を創造した。神の園の泉から、慈しみの女神エレオス、怒りの女神スィモス、幸福の女神エフティヒアが生まれた。女神エレオスは、サヴマスモス、イクトス、ピスティの三柱の女神を生む。女神スィモスは、パソス、フォボス、アフティの三柱の女神を生む。女神エフティヒアは、ドロピ、メタニャ、リピ、ディスティヒアの四柱の女神を生む。

不幸の女神ディスティヒアは、美しい青年プセマの姿で、女神エモニと結ばれる。二人の間には十七の悪魔タナトスが生まれた。プセマはエモニのもとを去る。ディスティヒアは傷心のエモニに、三大女神エレオス、スィモス、エフティヒアがプセマを誑(たぶら)かしたと嘘の進言する。怒り狂ったエモニは、神の園にタナトスを放った。

女神たちの戦争は、千年続いた。草木が枯れ果て、海が干上がり、山が砕け散り、神の園は地獄になった。これを見かねた大天使アリスィアが、雲の上から降りてきた。アリスィアに真相を告げられたエモニは、自らの罪を罰し、女神たちに許しを乞うた。こうして戦争は終結したが、エモニが呼びかけてもタナトスたちは破壊を止めなかった。嘆いたエモニは自らの命を絶ってしまった。女神たちは母であるエモニの体を、かつて泉のあった地に埋めてやった。するとそこから天を衝かんばかりの巨木が生えてきた。

女神たちはその巨木のことを、世界樹と呼んだ。

その世界樹の天辺に、大地を乗せ、人間を造った。けれど世界樹の外は地獄が広がっているので、人間たちが大地から落ちないように、魔物を放った。

――大魔導士叙事詩。

歴史を遡(さかのぼ)ると、人間というのは脆弱な種で、跳梁跋扈する魔物たちにとっては恰好の獲物でしかなかった。魔物が住み着かない平らな

大地を見つけ、そこに身を寄せ合い暮らしたのだ。
時が経ち、村は町へと、町は国へと姿を変えたが、人間はまだ、魔物の影に怯えながら暮らしていた。そしてある時を境に、森や山に餌をなくした魔物たちが、平らな大地に下りてくるようになった。抵抗空しく、次から次へと人が食われていく。日を追うごとに死者は増え、王国が堕ちるのも時間の問題――そう思われた時、遠い東の地より二人の魔導士が現れた。
大魔導士レイアと、弟子のディオリスである。
二人の魔導士は「魔法」という不可思議な力を使って、魔物たちを退治してみせた。魔導士たちは英雄として王国に迎え入れられた。神秘の力に魅せられた王は、魔導士たちに「魔法」の教えを乞うた。こうして魔法は、人々に伝わった。自衛の術（すべ）を身につけた人々は、魔物の脅威に怯えることも前より少なくなった。人間たちの版図は、平らな大地を出ることこそなかったが、拡大の一途を辿っていった。
だが、不幸は訪れた。
魔導師ディオリスの反逆だ。
ディオリスは大魔導士レイアを殺して、師の秘術であった不老不死の魔法を我が物にした。さらに魔物の軍を率いて、王国に攻め込んだ。
人間たちは魔法を武器に戦った。
戦争はしばらく続いた。やがて不死王ディオリスを滅ぼすために、大魔導士レイアの、五人の高弟たちが立ち上がる。五人の高弟は、大魔導士レイアに授けられた聖なる光の魔法を使い、ディオリスを見事討ち滅ぼした。
不死王ディオリスを討った五人の高弟には、王から領土と爵位が与えられた。これが今日の五つの公国と五人の公王となる。
――公開処刑の記録。
クルト歴三百七年。赤い空の日。
不死王ディオリスの公開処刑が行われた。
処刑台に括り付けられたディオリスは、狂ったように哄笑してい

た。
火がつけられると、群衆はざわめいた。
ディオリスの哄笑は、いつまでたっても鳴り止まなかった。
――語られぬ歴史。
不死王ディオリスは、全身を焼かれても死にはしなかった。
五人の高弟は王に命じられるまま、ディオリスの体を教会地下の隠し部屋へと移した。
腕を切り刻んで、眼をくり抜いて、脚を千切って、心臓を貫いて、窒息させて、頭を潰して、毒を飲ませて、首を斬り落として、酸を浴びせて……壮絶な拷問の末、ディオリスはようやく事切れた。
ディオリスの死を告げると王は大変喜び、五人の地位を約束した。
……ただ一つだけ、五人には隠していることがあった。
それはディオリスが最期に残した言葉だ。
『汝(なんじ)らの末裔にこの不死王、転生せし時、世は再び闇に包まれるであろう』
もしもこの中の誰かの子がディオリスの意思を継いでいたならば、その時は、他の四人の手でそれを討とうと、五人は誓いを結んだのであった。

――ユスティヘル家史書。
クルト歴七百九年。次女のエーテル・アルレット・ベル・ルネッタ・ユスティヘルが高熱を出す。随一の祈祷師が寄こされるも、謎の奇病により処置できず、享年三歳で死亡。

エーテルは本から顔を上げた。
「――は!?」
本を置いて、馬鹿げたことだと思いながらも、自分の体をあちこち触ってみる。
「……はっ？　え？　何言ってるの？」
素っ頓狂な声が、書物庫の暗闇に響いた。

chapter 1 ― 8 話を聞け！

世界樹神話や、大魔導士叙事詩などは一般教養の部類だが、公開処刑の記録は寡聞にして知らなかった。強く興味を引かれたのがこの後の、拷問室での一連の出来事。おそらくこれは公爵家のみぞ知る事実だろう。そして、ユスティヘル家史書の冒頭に記された彼女の死が意味するところは。

「まさか……」

だが、そう考えると納得できることが多い。

（なんか、大きな話になってきたな……）

とにかく続きを読まないことには何も分からない。静かに息を吐いてから、本を手に取った。中断した段落から、文字を視線で追っていく。

……その時、どこかから、コツンと床を鳴らす音が響いた。

エーテルは椅子から飛び上がって、すぐさま本を閉じた。

（誰……!?）

急いで本棚に本を返しにいく。慌てて、残りの三冊も取りに戻り、元あった位置に差し込んでいく。そのまま一番奥にある本棚の裏へと駆け込んで、うずくまる。

（どうして？　魔法は使ってないのに……）

首に提げたオーブを両手で包み、ライトを消す。息を殺して、物音に耳を澄ませるけど何も聞こえない。

水を打ったような静けさだ。

（……気のせい？　ネズミならいてもおかしくないし、神経質になりすぎて聞き間違えた？　かもしれない。魔法道具（マジック・アイテム）もなしに私を見つけられるとは思えないし……）

その小さな希望は、庫内全体に破砕音が鳴り響くことで、打ち砕かれた。

「わきゃあっ!?」

自分の口から出たのが信じられないくらい間抜けな悲鳴を上げて、エーテルは肩をびくつかせた。

何者かに扉が蹴破られたようだった。奥から微かな明かりが差している。
（どうしよう！　どうしよう！　どうしよう！）
最善の手は、やはりここでも実力行使か。理由は書斎の時とまったく同じ……だが、オーブを包む両手の震えが止まらない。悪い予感がする。この城に、エーテルを凌ぐ魔法士は……一人だけいる。
（ありえない！　だってあいつは王都に向かった……いくらなんでも、ありえない！）
突如、明かりがついた。
庫内の闇が追い払われて、隅々まで照らし出される。備え付けの不朽魔法光（エターナル・ライト）はどこにもなかった。誰かが光魔法を使ったということだ。何者かの足音が庫内の中央――エーテルが座っていた机の前で止まる。心強かった暗闇がなくなり、エーテルはさらに体を丸めた。実力行使に出るなら、機を見て飛び出すべきだが……。
「姿をお見せください」
それは、今彼女が最も聞きたくない声だった。
（あああああぁぁ……！　王都に行ったんじゃなかったのおおっ!?）
靴の音が、だんだん大きくなる。
「それで隠れているおつもりですか？」
本棚の角から、ひょこっと銀髪の女が現れた。
「ひゃあっ!?」
お化けでも見たようなエーテルの悲鳴に、護衛の女――アリシア・アークは肩をすくめた。
ドレス風の鎧を身にまとい、長い銀色の髪を後ろでまとめている。胸も尻もない細い体は、しなやかに引き締まった騎士の体だ。少しかかった前髪の奥に、鋭い眼差しが宿る。
「……ア、アリシア！　ど、どうしてここが分かったの……？」
「警戒していたからですよ」
「……ちゃんと答えて」
場違いなほど取り澄ました物言いに、エーテルは苛立つ。
「失礼いたしました。私は、主より、ここへは姫を近づけないように厳

命されておりました。そこで私の得意とする無属性魔法に、センサーの働きをする魔法がありますので、それを扉に張っておきました」
（そういうことか……。あの時、お義父様と話していた相手はこいつだ……）
「……王都に向かったんじゃなかったの？」
「急ぎ戻ってまいりました」
「走ってきたの？　人間のすることじゃないわね。この化け物」
「恐れながら、姫もその素養をお持ちですよ。まだ成長の途上ではありますが、鍛錬次第では私を超えるかもしれません」
　アリシアの口調は徐々に険を帯びていく。
「……ところで先ほど、姫は、私を魔法で眠らせて逃げようとお考えでしたね」
　小さく舌打ちする。この女にはすべてお見通しのようだ。
「ちょうどいいので、私が直々に課外授業を受け持ちましょう」
　エーテルは目をぱちくりさせた。この女は一体何を言ってるんだ？　何でそうなるんだ？
「あー、そういうのいいから。私がこの部屋にいたことは今さら隠せないし」
　そもそも、アリシアを眠らせるなんてできっこない。
「怖いのですか？」
「……は？　よく聞こえなかったけど？」
　苛立ちを隠せなかった。
「私と戦うのがそんなに怖いのかと、お聞きしました。臆病な、お姫様」
（何だとおおっ!?　むかつく！　あぁー、むかつくうう!!）
　涼しい顔をした目の前の女を、これでもかと睨みつける。ここまでばっちり顔を見られてしまったら強行突破にメリットなどない。どのみち罰を受けるしかないのなら、大人しく投降するべきだ。
　だけど理屈の上で分かっていても、これは感情の問題だ。
「そっちがその気なら！　怪我しても知らないわよ！」
「こちらからは手加減いたしますので、どうぞご安心を」

（くそっ……見下されてる！）
アリシアは強い。全属性・略式詠唱を使いこなし、おまけに騎士としても一流。
だがそれはエーテルとて同じことだ。全属性において最上位魔法を習得しているし、いくつかの属性ではアリシアさえも凌いでいる。
「相変わらず尊大ね。そんなに自分が強いと思ってるの？」
「先ほど申し上げた通り、これは授業ですよ、姫。生徒は先生には勝てません」
「……あぁ……もぅ……ほんっとに嫌い！」
手をかざし、詠唱する。
――〈火炎槍（フレイム・ランス）〉
手から火の渦が起こると一瞬で庫内の空気を呑み込み、巨大な炎の槍になって射出される。火属性・最上位魔法の、略式詠唱だ。アリシアならこの程度、軽く回避してのけるだろうが、エーテルの狙いは書物だ。焼き払ってしまえば残るのは灰だけ。何を読んでいたのかと後で聞かれても、適当なことを言ってごまかせる。
そう期待して放った炎魔法だったが、アリシアに当たる寸前で、文字通り停止していた。
（はあっ!?）
制止した炎の槍はゆっくりと弱々しくなって、数秒後には影も形もなくなっていた。
「何したのよ！」
「ふふ、質問ですか？　授業らしくなってきましたね」
「いいから答えろよっ!!」
怒声を浴びせられると、アリシアは困ったような笑みを浮かべた。
「姫、言葉遣いがなっていませんよ」
「お前がっ――」
「いいでしょう、いいでしょう。お答えしましょう。お勉強の時間です、エーテル姫――。そもそも魔法とは何ですか？」
アリシアはまるで人類の命題にでも取りかかるような大仰な素振りで、両手を広げた。実に活き活きとしている。緊張感はカケラも持

ち合わせてないのに、まるで隙を見せていないのがまた恐ろしい。何をされても対応しそうだ。
「魔法とは、体内のマナが〝儀式〟を触媒として、事象に干渉し、生じる現象です。魔法は、固有魔法と汎用魔法に大別され、儀式も、主となるのは二種類しかありません。固有魔法は魔法陣を、汎用魔法は呪文を、それぞれ〝儀式〟として――すなわちマナの触媒として――用(もち)います……。……おや？　言われなくても知っている、というお顔ですね」
　まるで歳の離れた妹をからかっているような喋り方だ。アリシアは意図していないだろうが、緊迫した状況に相応しくない口調は、エーテルをこの上なく不快にさせていた。
「ええそうね。どうでもいいことを長ったらしく語られて、他にどんな顔しろって言うの？」
「基礎をより深く知るのは大切なことですよ。――姫は、実戦経験はおありですか？」
「あるわけないでしょ……。城の外にも出たことないのに。嫌味？」
「とんでもございません。では、ここで積んでおきましょう――〈風砕(ブラスト)〉」
「……え」
　アリシアは魔法を詠唱していた。
　うねり狂う風の龍が、大量の埃(ほこり)と本を巻き上げながら迫り来る。
「――きゃあああ!?」
　体をひねって紙一重のところで難を逃れた。将棋倒しになった本棚を見て、一瞬でもそこへ飛び込もうと考えていたことに寒気がした。
「な……、な……っ!?」
「実戦訓練ですので、無論、こちらからも攻撃しますよ？〈火炎弾(ファイヤ・ボール)〉」
　平気な顔で二撃目を放つアリシア。あまりの容赦なさに憮然としかけたエーテルだったが、やられっぱなしは柄ではない。
「〈大水(フラッド)〉！」
　爆音とともに撃ち出された火球と、水の激流がぶつかる。

火は跡形もなく飲み込まれ、水は勢いそのまま目標(アリシア)をめがけ突き進む。
迫り来る激流を、アリシアは鮮やかなステップで横にかわして――
「〈電撃(スタン)〉」
相手の詠唱が聞こえた時、しまった、とエーテルは心の中で叫んだ。
アリシアが唱えた呪文は低位の――空中に電気力線を作らず導体に伝わせて敵を感電させる――雷魔法だ。本来は至近距離でしか使えない魔法だが、アリシアとエーテルの間には、瞬間的に水の道が出来ている。まさにおあつらえ向きの導体と言える。電気が物を伝わる速度は言うまでもなく、発動された瞬間に勝敗は決する。
エーテルはとっさの判断で後方に飛びのき、流水から距離をとっていた。一瞬でも遅れていたら感電していただろう。
行き場をなくした電気が、最後の悪あがきで手を伸ばそうとするが、これなら容易に対処できる。
〈土人形の盾(ゴーレム・オブ・プロテクション)〉
板張り床を突き破って、大きな岩の手がせり上がる。土人形(ゴーレム)の手は、飛んできた静電気をコバエのごとく握りつぶすと、その形のまま動かなくなった。
土人形(ゴーレム)の握り拳の向こう側から、ぱちぱちと手が鳴った。
「お見事です。正直、今のを回避されるとは思いませんでした」
「あっそ！　……気は済んだかしら！」
「いいえ、まだです」
「はあっ!?」
両者の間にそびえ立つ土人形(ゴーレム)の手が、斜めに切り落とされた。
開けた視界の向こうには、抜き身のロングソードに両手を添えるアリシアがいた。絶句するエーテルを無視して剣をしまうと、アリシアはおもむろに近づいてくる。
「魔法には……大きく分けて八つの属性があります。火、風、水、雷、土、無、光、闇……」
語りながらも歩みを止めないアリシアから、言い知れない恐怖を感じた――その時、目の前からアリシアが消えた。そして次の瞬間、全

身を叩きつける凄まじい風を受けて、エーテルは慌てて横に飛んだ。
――自分がいた場所に、拳を振り抜いた恰好でアリシアが立っていた。
「――ご存じのように、各属性には弱点があります」
「殺すつもりっ!?」
「ゆえに同格の魔法士同士であれば、大抵は後出しした方が有利になります」
「おい無視するなっ……うあっ!?」
頭上に飛んできた椅子をかがんで避ける。アリシアが蹴り上げたものだ。
「いい加減にしてよ！　こんなの当たったら痛いじゃ済まないのよ!?」
「――つまるところ実戦において、火、風、水、雷、土……光と闇は言うまでもありませんが……これらの属性魔法は、少々頼りないのです」
「あぁぁぁぁもう！　だからっ！　話聞けっ、この年増!!」
「……」
一瞬、ほんの一瞬だけ、場の空気とアリシアの笑顔が凍り付いたように感じた。しかし何事もなかったように、授業は続けられる。
「対応力、殺傷力、即効性、いずれにおいても優れているのは無属性であり――」
またもアリシアの姿を見失う。
（……くそっ！）
先ほどと同じ要領で、だが今度は極力最小限の動きで、攻撃をかわす。しかし、アリシアの攻撃はそこで終わらなかった。流れるようなコンビネーションで次から次へと攻撃を加えてくる。ハイキックが鼻先をかすめ、パンチがあばら骨にかする。タックルを両腕で防ぐ。
反撃する余裕なんてまったくない。
「また、固有魔法と、汎用魔法では――」
こともあろうに、アリシアは攻撃を加えながら説明を続けるつもりらしい。落ち着いた口ぶりは、猛攻による息切れをまるで感じさせな

い。
「――固有魔法が、より実戦向きと言えます。汎用魔法は、発動に呪文の詠唱を要しますので、例えば今の貴女のように、詠唱のタイミングがつかめないと話になりません。対する固有魔法は、魔法陣にマナを流し込むだけ……たったそれだけで魔法が使えます――――隙あり！」
エーテルの下腹部に掌底が叩きこまれた。
「あっ……くうっ!? うううう……」
腹を襲った鈍い痛みに耐えかね、エーテルはよたよたと数歩さがった。
「遅くなりましたが、ご質問にお答えしましょう。貴女の最初の魔法を止めたのも――私の格闘術も――どちらも無属性の固有魔法によるものですよ。タネ明かしをすると、この鎧の内側に、魔法陣が仕込まれているのです」
そう言うと、アリシアは自分の装備を見やすくするように手を広げた。
エーテルは涙の滲んだ目でそれを睨みつける。
「……卑怯者」
「心外です。姫……私はただ、貴女に知ってもらいたかったのです」
苦笑いのアリシアは肩をすくめて、おもむろに自分のスカートを千切りだした。縦に裂くのではなく、裾だけを器用に千切り取って、手ぬぐいのようにする。
その行動の意味は理解できないが、不穏な気配が漂っている。迫り来るアリシアの一歩に合わせて、エーテルの足も後ずさる。一歩、また一歩、ついには壁を背にしてしまう。アリシアの手には、三切の手ぬぐいが握られている。
「フフフフ……」
「……な、何？　何っ？　来ないでっ。ちょ、来ないで！　お、お義父様に言いつけるわよ！　何がしたいのよっ!?　来ない――きやああああっ!?」

chapter 1 ― 9 地獄だ…

「……何っ？　何なの？　こ、来ないでっ。お、お義父様に言いつけるわよ！　何がしたいのよっ!?　来ない――もごっ!?」

アリシアは、目にも留まらぬ速度で右腕を一閃した。

すると次の瞬間には、エーテルの口内に、丸められた手ぬぐいが詰め込まれていた。怯んだエーテルの後ろに回り込んで、もう一枚の手ぬぐいで口を縛る。そういう趣味があるのかと思うくらいの、手際の良さだ。

猿ぐつわだ。

「もごっ、もごもごっ」

「それでは、ふふ、魔法を使ってみてください、ふふ……」

「もごもごもごっ」

ここにきて初めて、アリシアの涼しい微笑みがくずれる。上塗りされたのは性悪女の笑みだ。

「できませんか？　できませんよね？」

「もごごっ」

「姫はどうでもいいとおっしゃいましたが、儀式について学ぶことは肝要です。汎用魔法は口枷をされるだけで、こうもあっさりと無力化されてしまうのですから……」

「もごもごもごもごごっ」

「それはどうでしょう？　実戦では何が起きるかわかりません。より対応力のある戦法を取るのが騎士の嗜みです」

ふと見上げれば、そこには姉が妹に向けるような微笑みがあった。

「私の授業はここまでです。お付き合いくださり、ありがとうございます」

ようやく終わった……。

エーテルはじっとりと睨み「早くこれを外せ」と言外に命令する。だが、お姉さん然とした笑顔が返ってくるだけだ。気まずい静寂が二人を包む。すると何を思ったかアリシアはいきなりエーテルの後ろ手をねじり上げ、手ぬぐいで縛り始めた。

「もがっ（ちょっと）、もがもがもがもがっ（これ以上何するつもりよ！）」
「ふふ、昔を思い出しますねえ。懐かしいですねえ、ふふ……」
完全に身動きの取れなくなったエーテルを、唯一壊れずに残っていた机に押しつけると、アリシアは手を高々と振り上げた。
「悪戯（いたずら）する子は、百叩きですよ」
（……しょ、正気かこいつ？）
アリシアは正気だった。
容赦のない平手が、エーテルの突き出された部分に打ち込まれた。
――ペシィィン！
「もがあっ（痛いいい！）」
――ペシィィン！
何とも恥ずかしい音が響く。
――ペシィィン！
単なる痛みよりも、羞恥の方がずっと上だった。
「もがあっ（やめろおおお！）」
――ペシィィン！
「私はまだ二十代ですがっ！」
「もがもがもがあっ（気にしてたのか！）」
――ペシィィィィン！
怒りがこもったせいなのか、平手打ちの威力が数倍に増した。三発目にして耐えがたい痛みになりつつあった。
――ペシィィィィン！
「もうすぐ三十ですよ悪かったですねえっ!!」
「もがもがっ（痛いってば！）」
――ペシィィィィィィン！
「年増で悪かったですねえっ!!」
「もがもがあっ（もう分かったって！）」
エーテルの経験上、アリシアは百回叩くと言ったのなら、百回以上は確実に叩く女だった。つまりあと九十四。
――ペシィィィィィン！
あと九十三。
――ペシィィィィィィィン！

あと九十二。
――ペシィィィィィィィィィン！
あと九十一。
――ペシィィィィィィィィィィィン！
あと九十。
（あぁ……地獄だ……）
エーテルにできるのは、百を超えないように叩かれた回数を覚えることだけだ。
――ペシィィィィィィィィィィン！
地下の書物庫という名の地獄から、恥ずかしい音が響く。

Chapter2

chapter 2 ― 1 お先真っ白

西館の一階にある懲罰房(ちょうばつぼう)は、静寂に包まれていた。

採光窓から差しこむ月の明かりで、エーテルは本を読んでいる。

持ち込みを許された書物は数冊だけ。大切に読もうと思って今朝手に取った大長編の物語は、今やその手の中で終わりを迎えようとしている。

ちょうど、闇の帝王エルキドが自分の父だという事実を知った主人公がエルキドを悪のサイドに引きずり込んだ悪魔オズマンドとの最終決戦に臨んだところだ。この後の展開は、子どもの頃何度も読んだので、よく知っている。主人公にトドメを刺そうとしたオズマンドを、後ろからエルキドの魔剣が貫くのだ。オチはありきたりすぎて琴線に触れないが、壮大な世界設定がエーテルの好みだった。

あとがきまで読み終えると、裏表紙に両手をおいて一息ついた。

「ふう、最後まで読んでしまった……。もう夜だ」

満足げな溜息をついて、おもむろに前屈をする。体を二つ折りにすれば、読書の疲れがすっと和らいでいくようだった。体はどちらかと言えば柔軟なほうだ。

気持ちが良かったのでエーテルは、思いつく限りの柔軟体操を、片っ端からやってみることにした。

懲罰房に叩き込まれたのが昨日の夕方。自分のしたことを考えると、おそらく五日間はここから出られない。数冊しかない暇つぶしの本を、たったの二日で消費してしまったのは、愚かだと言わざるをえない。

股関節のストレッチをしながら、椅子に積まれた本を、横目で見上げる。昨日と今日で読了した六冊だ。……姿勢を変える。読み終えたばかりの最終巻を手に取り――腰を反らしながらその手を頭上に持ち上げると、そのままゆっくりと真後ろに下ろして――積まれた本の上に加えてやった。ポッキリ折れてしまいそうなほど反り返った

腰は、本の運搬(うんぱん)を終えると元に戻っていった。
エーテル愛読の『七つの魔剣物語』は、クルトでは知らぬ者のいない文学作品だ。
(やっぱりいいなあ……)
王都では演劇化もされているらしい。
脚を百八十度開いたが、何も思いつかず、とりあえず前屈してみる。
一向に眠くならない。
考え事をして長時間過ごすのは嫌いじゃない。
上半身を床にべったりと付けたおかしなポーズのまま、昨日知ったことを整理してみる。
――不死王ディオリスは処刑後も生きていた。
――教会の地下拷問室に連行され、そこで殺された。
――そして死の間際、五大貴族への転生を誓った。
――三歳のエーテルは病に犯されて一度死に、蘇(よみがえ)った
昨夜(ゆうべ)のうちに答えは出ている。
エーテルが家族から受けている、不自然なまでの冷たい仕打ち――その裏に隠された事実。
信じがたい話だったが、ここまで揃えば、あとは簡単なパズルを組み立てるだけだ。
体を起こし、脚を閉じる。
「ディオリスの生まれ変わり……私が……」
硬いベッドにそっと腰かけ、格子窓ごしの小さな夜空を見上げる。
あれが妄想日記じゃないのなら、エーテルは一度死んだのだ。
そして、生き返った。
次に起こることは容易に想像がつく。
ユスティヘル家の当主は、不死王ディオリスの復活を認識する。四百年前とは異なり、五人の高弟――五つの公爵家の仲は良好ではない。ディオリスが転生したことを知ったら、きっとここぞとばかりに結託し、ユスティヘルを貶めにかかる。
だからこそエーテルを城に閉じ込めることで、外に情報を漏らさないようにした。人並み以上の教育を受けさせたのも、他の貴族から怪

しまれないよう外聞を気にしたに過ぎない。
ざっとこんなところか。
もしかしたら――エーテルは気づいてしまう――十一年前の事故も、原因は自分なのかもしれない。行楽に出かけた先で魔物の襲撃に遭ったと聞いているが……例えば、不死王の宿主である自分が、無意識のうちに魔物たちを引き寄せた――考えられる話だ。
「嫌われるのも無理ないな……」
そう考えるとエーテルの周りには〝死〟が多すぎる。
姉のアンデラは病気で死んだし、弟のライオネルも死んでいる。実の両親は魔物に喰われて死んだ。使用人も大勢死んだ。
もしもこれがエーテルの仕業だとするなら、疎まれても仕方がない。いや、殺されないのが不思議なくらいだ。
「フフ……」
思わず笑みがこぼれた。
寂寥（せきりょう）を紛らわすための笑みじゃない。
エーテルは、この状況を歓迎していた。これこそが、彼女がずっと待っていた変化だ。退屈な毎日から抜け出す、最初で最後の足掛かりだ。
硬いベッドの上に寝転ぶ。
ストレッチをしたせいで火照った体を、持て余すように、転がす。仰向けになったり、うつ伏せになったり、横向きになったり、シーツを引っ張ったりもした。
興奮で眠れそうにもない。
眠るつもりもなかった。
ここから出た後の計画を練らなければならないからだ。
目的はもちろん、不死王ディオリスについて、より多くを知ること。
――だが書物庫に入ることは恐らく不可能だ。一度侵入を許してしまった場所は、より厳重になると見て間違いない。あの日誌を途中までしか読めなかったのは痛かった。しかし仮に忍び込めたとして、益があるのかも不明だ。アリシアとの戦闘で、大部分の本は消失している。

ならば目指すは、城の外だ。
記録によれば、例の教会はここリハネスにある。
ひょっとしたら拷問部屋がまだ残っているかもしれない。残っていなかったとしても教会に行けば何か手掛かりがあるかもしれない。町に出ればディオリスに詳しい人から話を聞けるかもしれない。そんな「かもしれない」が城の外には溢れている。
どうにかして、城を出なければならない。
（でも、どうやって？）
城は全方位を高い塀に囲まれている。この塀は特殊な魔法道具（マジック・アイテム）を組み込んでいて、マナを検知すると、高圧電流が流れる仕組みになっている。
よって脱出の際に魔法は使えない。例の魔法道具（マジック・アイテム）があるせいで、逃亡した先での使用も問題外だ。
さらに加えて、今頃、使用人連中は監視体制の見直しを行っているだろう。つまり、ここを出た後の監視は、前よりもずっと厳しくなる。
どうやったら城から出られるのか？
その答えは――協力者を得る――この一言に尽きるだろう。
（馬鹿ね……誰が私に協力なんてするの？）
そう、その企ては現実的なようであり、そうではない。ことユスティヘル城において、彼女は貧乏神的な存在であり、いわば共通の敵だ。エーテル排斥の色に染まりきった使用人たちは、間違っても協力者にはなり得ない。
「……あ！」
一人だけ思い当たる人物がいた。
（あの娘（こ）なら！　まだ入ったばかりのあの娘（こ）なら、味方になってくれるかもしれない）
演技だったとはいえ泣かせてしまった、あのメイド。
そばかす一つない肌と、気弱そうなまなざしが印象的な、あのメイドだ。元より、暴言の件は謝ろうと思っていた。それを機に仲良くなって、頼み事を聞いてくれるようになれば、脱走計画も現実味を帯びてくる。

人の好意を利用するようなやり方だが、仲良くなりたいのは本心だ。
「やることは決まったわ」
エーテルは、毛布を抱き込みながら転げ回る。みすぼらしいベッドが軋みを上げて、これ以上はしゃぐなと文句を言う。
これで、抱える問題は一つのみとなった。
快適な牢獄生活を送るためには必要不可欠な、本の、調達だ。
（明日、お願いしてみよう……）
エーテルにとっては切実な、問題だ

Chapter3
chapter 3 ― 1 絵になる

リハネスの城下町から、上り坂を馬車で少しだけ行くと、ユスティヘルの城は見えてくる。ところどころに芸術家の工夫が凝らされた、美しい城だ。

職人から言わせれば「精巧な城」だろうか。

「エミル、見ろ。こりゃあ大仕事になるぜ！」

丘の上の城を眩しそうに眺めながら、リザード革のテンガロンハットを被った男が吠えた。

「はい、おやっさん」

エミルと呼ばれた少年は、彼に比べるとやや線が細い印象だ。肌は褐色、巻いたバンダナから黄色い髪がはみ出している。無骨な身なりではあるが、目鼻立ちはくっきりと整い、将来は多くの女性を泣かせることになるだろう。

テンガロンハットの男――デリックは、この町で一番の彫刻師だ。弟子のエミル・ヴァレルを伴い、武者修行の旅と嘯(うそぶ)いて、しばらく隣国のアルテフィラ公国に拠点を移していたのだが、この度ユスティヘル公爵から依頼を受けて呼び戻された。

道中、口を開けば公爵の文句を言っていたデリックであったが、城の外観を見て機嫌を直したようだった。エミルは安堵した。

城門前で馬車が止まる。仰ぎ見ると、城の規模にしては塀が高すぎることが分かった。六、七メートルはあるだろうか。これは職人の卵として見過ごせない。せっかくの芸術的建造物を、こんな野暮ったい石の壁で隠してどうするのだ。エミルは憤慨した。

人力では到底開きそうもない門が開き、馬車を招き入れる。

御者の男が番兵の指示に従い馬車を停めると、デリックとエミルは地面に飛び降りた。

家令と思しき老人が二人にお辞儀をして、口を開く。

「お待ちしておりました、デリック様。公王様は、玉の間にて依頼の内

容をお話しするそうです」
「ここまで来たんだ、玉の間でもどこでも行くぜ。そんじゃあエミル、後のことは任せた」
「はい、おやっさん」
エミルは、デリックが執事に連れられていくのを見送った。
作業に移る前に、庭を見渡してみる。大きな円形の花壇には折れ曲がった歩道があり、白いガゼボへと続いている。噴水や池もある。庭と言うより庭園と言ったほうがよさそうだ。こんな光景を、仕事でもなければ、目にする機会はもう二度と来ないだろう。エミルは少しだけ庭師たちを羨ましく思った。
「さてと……おやっさんにどやされる前にやってしまうか」
馬車の荷台を覆った布をはがすと、御者（ぎょしゃ）の男に手伝ってもらいながら荷下ろしに取りかかる。多種多様の彫刻刀が納められた革のポーチや、魔鉱石塗料の缶、足場を作る道具に、その他の道具を、使うものと使わないものとに仕分けて、荷台から下ろしていく。
エミルが彫刻師見習いになったのは、十一歳の頃。師事してもう四年になるが、未だ下積みに明け暮れる毎日だ。時には道具のメンテナンス、時には師匠の食事の世話をし、また時には買い出しに行き、そういった日々の雑用をこなしながら、デリックの技をひたすら見て盗む。そんな四年間だ。辛くはあるが、憧れて入った世界である、後悔したことは一度もはない。
今日もこうして師匠のサポートに徹する。
「すみませーん、足場を運ぶのに手を貸してもらってもいいですか？」
御者の男から返事はなかった。
御者の男は一切の動作を止め、呆然としてあらぬ方向を見ていた。
「どうかしたんです――」
言いかけて、エミルも動きを止める。男の視線の先にあるものを見たからだ。
――少女が花壇の中を歩いていた。
すらりとした細身に、白と水色のドレスをまとった少女。
風になびいた薄紫色の髪は、桐（きり）の花のようだ。

少女の輝きがあまりに強くて、後ろに侍女が三人随行していることには遅れて気がついた。侍女たちは、それぞれがキャンバスや画架などの画材を抱えている。少女はその可憐な足取りで、花々に囲まれた純白のガゼボに入った。

「天使だ」

エミルの口から忘我の呟きがこぼれる。

「あの女性は誰なんでしょうか？」

「……さあね。イルティア公国の姫君じゃないんですか」

御者の男は無愛想に答えると、作業に戻っていった。

「あれが姫君？」

つい見入ってしまった。

聞いていた話とはずいぶん印象が違う。

イルティア公国の姫といえば、一人しかいない――変わり者としてその名を知られている、エーテル姫だ。近隣諸国でもそう噂されていたほどに。

なんでもやたらと内向的で、城に籠もって魔法の研究に耽溺しているとか。

だが……、

（そんな噂を流した奴は誰なんだ？）

あの天使もかくやという美少女こそ、本当のエーテル姫じゃないか。エミルはとたんに鼓動の高まりを感じ、息が苦しくなった。

彫刻師見習いになり修行に没頭するようになってから、こんな気持ちになるのは初めてのことだった。仕事に関わりのない雑念は邪魔でしかないと、今まで全部切り捨ててきたから。

しかし、それは今回だって同じことだ。

一流の彫刻師になるのがエミルの夢なのだ。それ以外のことに割く労力なんてありはしない。と、決心しておきながらも目を離すのが名残惜しく、作業の手は止まったままだった。

エーテル姫が、白いガゼボの中で、キャンバスと向き合っている。キャンバスにはもう途中まで描かれた花々が見える。かなり遠目にだが、相当な画力の持ち主のようだ。ともすればエミルより上手いの

かもしれない。
（横顔が絵になるね……。あなたこそ被写体になるべきではないかな。僕が描いてあげよう）
脳内でエーテルを口説いてみたりもした。
思春期、真っただ中であった。
だが、その姫の側に控えたメイドたちを見て、ふと正気に戻る。
（……いや、だめだ。忘れよう。あの方は姫様、俺は農民の出だ。どう考えたって縁はないさ）
芽生えかけた淡い想いを黙殺し、作業に戻ろうとした。
……その時。
何かの画材を取ろうとしたエーテル姫と、エミルの視線がばっちり合ってしまう。
向こうで、エーテル姫の体がぴくりと跳ねた。
（しまった!!　覗いてたのがばれた！）
驚きとも困惑ともつかない様子のエーテル姫を、混乱したエミルはじっと見つめ返す。
（いや馬鹿か、俺は！　これ以上怖がらせてどうする！　見つめ返してどうする！）
しかし危惧していた事態にはならなかった。
エーテル姫はおかしそうに首をかしげると、エミルに向かってひらひらと小さく手を振ってくれた。遠くに見える微笑みが、エミルの心をきゅっと締めつける。
「美しい……！」
また、無意識の独り言がこぼれる。
それからというものエミルは、商談を終え帰ってきたデリックの拳骨を喰らうまで、作業そっちのけでエーテル姫にくぎ付けになっていた。

chapter 3 ― 2 変態サディスト女

早朝……。

エーテルは自室の鏡の前に立ち、いやに神妙な面持ちをしている。

窓の向こうからは山鳥のさえずりが聞こえる。

おもむろに胸のボタンを外して、腰紐を緩め、寝間着を床に滑り落とす。下着のみになると、反転して、鏡に向かって尻を突き出す。他人には見せられないポーズだが、誰も見ていないので問題ない。その恰好のまま、首をめいっぱい後ろに回す。

鏡に映った尻には、見るも痛々しい青あざが広がっていた。

「うわ……。結構ひどいなあ……痕にならないかなあ……」

念のため、パンツを膝までずらしてみたが……パンツで隠れていた場所にも、一ミリ余さず青黒いあざが出来ていた。

「あの変態サディスト女……」

エーテルは足の動きだけで器用にパンツを放り捨てるとベッドに倒れ込み、うつ伏せになる。尻のあざを見てしまった以上、痛みがなくとも、あまり負担をかけたくない。

「大嫌いだっ」

手をばたつかせて、ベッドに八つ当たりする。

「――変態っ、変態っ」

恨み言を吐き出してから、ふてくされた表情を枕に押しつけた。

「……」

……昨晩(ゆうべ)。ようやく懲罰房から出してもらえた。

過去最長の三十日間の監禁は、さすがに堪えるものがあった。だが、それより、三十日経っても、青あざというのはこうも消えないものかと、エーテルは不安で堪(たま)らなかった。

「変態アリシア……いつか絶対に復讐してやる……」

力いっぱい枕を締め上げながら、呪文のようにそう呟いた。

× × × ×

字数稼ぎのための人物紹介（読み飛ばし推奨）

●エーテル
身長１６３ｃｍ
体重４４ｋｇ
（趣味）
妄想
食べること
（嫌いなもの）
にんじん
アリシア
（備考）
勉強は嫌いじゃない。どちらかといえば秀才タイプ。優れた魔法適性を持ち、十歳という若さで全属性の魔法を扱えるまでになった。本当なら宮廷魔法士として招聘されるところだが、彼女の才能は父王によって秘匿されている。

●ユスティヘル公爵［エーテルの義父］
（悩み）
長男のエイルトンが不出来
（頼れるもの）
長年の勘
アリシア
（備考）
国民思いの公王様。国民からの人気は絶大。妻のオラキア（湿地帯の魔女）は、昔は絶世の美女だった……。

●クラリッサ
身長１５９ｃｍ

体重４７ｋｇ
（特技）
小鳥を指にのせられる
（備考）
愛くるしい容姿に、性格も温厚。メイド募集時の面接で、面接官（家令の老人）は一目見ただけで彼女の採用を決めていた。

●アリシア・アーク
身長１６９ｃｍ
体重５３ｋｇ
（趣味）
狩り
お花
（備考）
リハネスの生まれ。孤児院育ち。剣術は我流。王国の近衛騎士団に入団する前は、ユスティヘル家で使用人として雇われていた。

●エミル・ヴァレル
（異性の体で好きな部分）
胸
（好きな食べ物）
肉
（備考）
女性に興味がないわけではなく、奥手なだけ。年に数回は告白されているほどの美青年。酒場のウェミニアも、あの一件以来人知れずエミルに片思い中。

Ｅｘｔｒａ　ｓｔｏｒｙ　酒場のウエミニア！

「エミルゥゥゥ！」
　突然、名前を呼ばれて、はっと我に返る。
　エミルは、机の下でこっそり眺めていた手紙を、握りつぶしてポケットにねじ込んだ。
「何ですか、おやっさん」
「何ですかじゃねえ！　ぼーっとしやがってよぉ。話聞いてんのか、あぁん!?　オヤジィィ！　もう一杯くれぇぇい！」
　デリックは、空になったジョッキを持ち上げる。無口な店主に代わって、店主の娘が快活に答えた。エミルの師匠はいつになく酔っぱらっていた。
「だぁからよぉ。この前、六国議会があったろぉ？　そん時、ユスティヘル公爵様は王都に召集された！　そこで！　王様の城を見てだな、その見事さに一目惚れしたってわけよ！」
　肘をつきテーブルに乗り出したデリックが、声を張り上げる。騒音を理由に喧嘩を売られでもしたらどうしようと、エミルは気が気ではなかったが、周囲の話し声も似たようなものだ。もとよりここは、こういう男が集まる酒場なのだ。
「エミルよ……俺ぁ複雑だぜ。確かに、この依頼はやりごたえがある！　だがな！　公王様は俺の仕事に惚れたんじゃねえ！　どこのどいつか知らねえが、国王お抱えの彫刻師だか何だか知らねえが、俺の技のほうが上ってことを見せてやろうじゃねえかよ！　俺たちが代用品じゃねえってことを思い知らせてやろうぜ！　なあ、エミ――ッて、おい聞いてんのか!?」
「……はぇ!?　あ。はい、聞いてます！」
「お前よー……どうしちまったんだ？　さっきから上の空でよぉ」
「き、気のせいですよ！」
　向かいの席からデリックの顔がぐぐっと寄せられる。これ以上ないほど怪しまれている。
「ま、ならいいんだがよ……」

デリックは店主の娘が運んできたビールを受け取って、一口煽(あお)ると、エミルを睨みつけた。
「女か？」
「ぶっ!?　ごふっ、ごふん！　ごふん！」
「はっはっは！　分かりやすいな、お前は！」
弟子が苦しそうにしているのを見ながら、デリックは腹を抱えて笑う。
「あのなあ！　俺から言わせりゃ、お前は真面目すぎる！　そりゃあ修行も大切だがな、俺がお前ぐらいの年の頃にゃあ野生そのものだったぞ！」
「ち、違いますよ……」
エミルは気恥ずかしさから、ビールを口いっぱいに含んだ。
「いいか！　男にはな、守るもんがなきゃ駄目だ！　守るもんがあるからこそ仕事に打ち込める！　仕事ってのは誰かを守るためにするもんだ。お前は何も分かっちゃいねえ。今のお前は仕事ばっか守ってやがる！　俺の経験上、それじゃ長続きしねえ。いつか空しくなっちまうんだ」
「は、はあ……」
「男はみな狩人だぜ。もたもたしてやがったら意中の女はすぐ横取りされちまう。いいか！　もしテメェの手の届くところに気になる女がいるなら、迷わずつかみ取れ。ベッドがあったら押し倒せ！　それができねえようなら男じゃねえ！」
デリックはビールを飲み干すと、テーブルにジョッキを叩きつけた。
「おいオヤジィィ！　もう一杯くれぇぇぇぃ！」
店主は相変わらずの無口だ。返事をしたのは店主の娘だった。
エミルは説教の勢いに逆らえずできなかった問いを、今投げることにした。
「あの、おやっさん。どうして俺が、その……」
言いにくそうにしていると、デリックは歯をむき出して笑う。師匠がこの笑い方をする時は、大抵は気分が良い時だ。

「俺の目をごまかそうったって、そうはいかねえぞ。エミ坊！」
「エミ坊はよしてください……。けど、やっぱり気づかれてましたか」
「あたぼうよ！　お前、あの娘のことずっと見てたろ!?」
「う……。はい……」
「よし、決めた！　いっちょ俺が言ってやろう！」
「や、やめてください!?　相手は――」
――この国の姫ですよ。そう言おうとしたが時すでに遅く、酔っ払いデリックは飛び上がらんばかりに席を立ち、親指を立てた。
「オヤジィ！　あんたの娘、うちのエミ坊に嫁にやってくれんか！」
「はぁぁぁぁ!?」
師匠に負けず劣らずのジャンプで立ち上がったエミルに、デリックがまた親指を立てた。折しもビールを持ってやってきた店主の娘が、恥ずかしそうにうつむいていた。
（この酔いどれは一体何を勘違いしてるんだ！）
「ち、違っ、おやっさん!?」
「んだよ？　恥ずかしがることなんてねえぞ、エミ……」
「駄目だァァァァッ!!」
怒鳴り声が響いて、酒場が静まり返った。
常連客ですらほとんど聞いたことのない声が、突然、店内に響き渡ったのだ。滅多なことでは道を譲らない酔漢たちが、この時ばかりは歓談をやめた。
「小僧、お前なんぞにウェミニアはやらんぞ！」
「父さん……恥ずかしいからやめて」
店主は今にもつかみかかってきそうな勢いだったが、娘のウェミニアが押しとどめてくれていた。
「みなさん、お騒がせしてすみませんでした」
ウェミニアが頭を下げると、酔漢たちは口々に不平不満を垂れながらも、歓談に戻っていった。
「……お、おやっさん、本当にやめてください……」
「何だ何だ？　違ったのか？　ぶわっはっはっは！　すまんすまん！」

もはや怒る気力もなくなって、肩を落とした。ぼうっとしていると、たまたまウェミニアと目が合った。だが、恥らうようにそっぽを向かれて、エミルはいたたまれなくなった。こちらを鬼の形相で睨んでいる店主に、見ないふりを決め込むのも、かなりのストレスだ。

（この店にはもう来れないな……）

弟子の気も知らずに笑っている師匠を、恨めしく思う。それと同時に、今日の昼、エーテル姫から渡された手紙のことを、師匠が気づいていないことに、安堵した。

それは手紙と言えるようなものじゃないのかもしれない。

丸めた紙を、侍女たちに気づかれないよう、こっそりとエミルに投げ渡してきたのだ。

そこには、こう書かれていた。

『お友だちになってください』

そして、こう続く。

『私とお手紙の交換をしませんか？』

メッセージを受け取った瞬間、エミルは人生が止まったような気さえした。あんなに美しい姫が自分などに興味を持ってくれたなんて、にわかには信じられない。

だが、あのエーデルワイスのごとき微笑みは、確かにエミルに向けられていた。

それにこうも思う。

なぜ姫は、こんな回りくどい手段を取るのだ。侍女の目を盗むように手紙をよこしたのだ。

エミルの頭の中では、どうしてかエーテル姫と、物語に出てくる囚われの姫が、重なっていた。

（返事を書こう……）

昼間から悩み続けていた問題にようやく答えが出た。

本人としては、認めたくないところではあるが、デリックの言葉が背中を押してくれたのだ。

――手が届くところにいるのなら、手を伸ばせ、と。

chapter 3 ― 3 大きな芋虫がいて

ドレスの裾をはためかせながら、回廊を歩く。少女の後ろには三人のメイドが同行する。あの一件以来、エーテルの監視は三人態勢になってしまった。

最初は煩わしくて仕方がなかったが、数十日も続けばさすがに慣れてくる。ただのメイドがいくら増えたところで、圧倒的妨害力を有するアリシアのような〝個〟には到底及ばない。そう思いたかったが、やはり数の力には侮れないものがあった。

監視態勢の強化にも悩まされたが、それ以上に頭を抱えたのはクラリッサのことだ。クラリッサというのは、エーテルが泣かせてしまった、あのメイドの名前だ。

彼女はクビにされていた。

考えてみれば当たり前のことだった。常時監視を怠ったクラリッサに責任を負わせるのは、道理だ。

これを知ったのが、釈放された翌日。

懲罰房の中でエーテルが練っていた計画は、早速狂ってしまったのだ。

こうなると内部に当てのないエーテルは、外部に協力者を求めるしかなくなる。と言っても効果的な方法などなく、せいぜい中庭に出て、描きたくもない風景画を描いているぐらいしか思いつかない。――なるべく人の目を惹きそうなドレスを着て。

そうやって興味のない花の絵を描くことしばらく、ようやく網にかかったのがあの青年だ。

あれから、監視の隙をついて、何度か手紙のやり取りをした。彼のこともたくさん知った。彫刻師見習いをやっていること。師匠のデリックの酒癖が悪いこと。城下町にある工房で働いていること。下町の長屋に一人で暮らしていること。

ずいぶん仲良くなれたと思う。

そう願いたい。

（問題は、いつ切り出すか、なのよね……）

メイドたちに気取られないよう、エーテルは小さく溜息をついた。
いくら距離が縮まったと言っても、こんなお願いを聞いてくれるだろうか。エーテルは自信がなかった。友人すらいたためしがないのに、異性となればなおさらだ。
女のために、男はどこまでするのか……。
それより何より――。
（まずは興味を持ってもらわないと）
心の中で、うーんと唸る。
この文通はそのための準備期間なのだ。
（もう持ってくれてるかな？）
つまりはこれがエーテルの悩みだった。
他人の心の動きなんて分かるはずもなく、いつお願いをしていいのかなんて、分かるはずがないのだ。もし、過度な要求をし、愛想を尽かされでもしたら目も当てられない。
だが彼だって、ずっとこの城にいるわけじゃない。いずれは仕事を終えて、ここにはもう来なくなってしまう。そうなってからでは遅いのだ。
（ああ……どうすればいいの……）
小さく溜息をついた。
今日も今日とて、エーテルは描画にはおよそ不向きなドレスをなびかせて、朝日のさしこむ回廊を歩いている。目的地は変わらず中庭の花壇だ。画材一式はメイドたちに持たせている。
思考を煮詰めても答えは出ない。
今のところはすべてが順調なのだから。
そう自分に言い聞かせて、歩いていると、茶色い髭を蓄えた男が向こうから歩いてくるのが見えた。すぐさま回廊の端へと寄り、道を譲（ゆず）る。
髭の男は、まるで家の中に紛れ込んだ野良猫を見たかのような目で、エーテルを睨んだ。その足をわざわざ止めることなどはしない。
エーテルはそれでも恭（うやうや）しく頭を下げた。
「おはようございます、お義父様（とうさま）」

この男こそはユスティヘル家現当主にして、イルティア公国の統治者。ゲドラ・エラルデ・オル・イゴル・ユスティヘルである。
ゲドラは歩き去る。まるで誰も居なかったと言いたげな態度だ。
いつもと変わりない対応だった。
今さら悲しくなったりはしない。ただ腹立たしかったのは、後ろにいた銀髪の女――アリシアが、こちらへ挑発とも取れる微笑みを向けてきたことだ。アリシアの顔を見ると、今でも胸がムカムカ――尻はムズムズ――する。
尻の青あざはあらかた治ったが、結局、少し痕(あと)になってしまったのだ。
百叩きの恨みは、ちょっとやそっとじゃ消えそうもなかった。

アリシアへの怒りはさておいて、さしあたって頭を悩ませなければならないのはエミルのことだ。
中庭へと出たエーテルは、涼しい風を身に浴びて、頭を切り換えた。
この頃は、外も過ごしやすくなってきた。
いつものように花壇のなかの石敷きの道を歩く。
門の前にエミルたちの馬車が停まっているようだが、御者の男が暇そうにしているだけだ。エミルたちはもう作業場に移ったのだろう。作業時間は日によってまちまちだが、今朝は早くから開始したようだ。
だから目当ての青年はどこにもいない。
だがエーテルの足取りは軽く、監視の目がなければスキップでもしそうな勢いだった。
エミルは師匠の言いつけで、道具を取りに何度もあの馬車に戻るのだ。その度、エーテルと目が合うので、微笑んだり、手を振ったり、手紙を渡したり、すればいい。
しかし心が躍るのには、もう一つ別の理由がある。
エーテルは、白いガゼボのなかに入るなり、ベンチの隙間にねじ込まれた紙切れを見つける。それを速やかに回収すると、そのままガゼボを通過して、薔薇(ばら)の前まで進んだ。

メイドたちはついてこない。画材をガゼボにセッティングしているためだ。無論、遠くへ行きすぎると作業を中断してやってくるが、このくらいの距離なら問題にはしない。

――もう一つの理由とは、この時こそがエミルから返事を受け取れる、日に一回限りのタイミングだからだ。

メイドたちを背にして、あたかも花々を観賞しているように思わせつつ、胸もとで紙切れをそっと広げて、皺を伸ばす――。

『こんなことを書くと、困らせてしまうって分かっています。でも、もう堪えられないんです。あなたに直接お会いして、話ができたらどんなに良いかって想ってしまうのです』

（よおし！　きたっ！）

「……どうなさいましたか？」

ついぴょんと飛び跳ねてしまったエーテルに、煩わしげな声がかけられた。

「あ、ああっ！　いえ、何でもないのよ！」

とっさに手紙を握りしめて、振り返る。

「大きな芋虫がいて、びっくりしちゃって。気にしないで……」

苦笑いになっていないか心配だったが、メイドたちは興味なさそうに目を反らした。そして作業に戻った。

（よし。これできっと彼は協力者になってくれる。あとは何をしてもらうか……）

冷たい朝の風のなか、エーテルは胸の高鳴りを抑えきれずにいた。

chapter 3 ― 4 ああもう駄目

就寝時刻を少し過ぎて、エーテルは体を起こした。
目が覚めたのではない。最初から眠ってなどいなかった。
シーツの上に腹ばいになって、ベッドから頭をぶら下げる。垂れ下がった髪が床についても気にせず、ベッドの下に目いっぱい手を伸ばす。視界の悪いなか、手間取りながらも手繰り寄せたものは、珍妙な布の束だった。
その正体は、細く切り出したドレスの生地を編み合わせた、お手製のロープだ。何度か引っ張って強度を試しているが、ドレスで作ったとは思えないほど丈夫な仕上がりであった。
彼女の体重くらい支えてくれるだろう。
静まりかえった寝室に……ひたひた……裸足の音が反響した。
当然だが、魔法の明かりはない。点灯なんてしたら、部屋に使用人が飛び込んでくるからだ。だからエーテルは、代わりにカーテンを開く。すると室内の様子がうっすら蒼(あお)く浮かび上がる。
今夜は満月だ。
エーテルは窓を大きく開け放った。夜気が室内に流れ込んだ。
窓台から外に体を出す。
出窓になっているのでぐっと頭を突き出せば、階下の窓が視認できる。明かりがついていたら、作戦は後日に延期するつもりだ。
(明かりのついた部屋は……なし。やるなら今のうちだ……)
そうと決まれば、ベッドの脚(あし)にロープの端をくくりつけていく。エーテル一人の力ではベッドを適した位置までは動かせなかったが、それは裏を返せばベッドの重量が充分ということでもある。加えてこのサイズなら、窓から落ちる心配だってない。
この前牢屋で読んだ老いぼれ猟師のドキュメンタリー小説から学んだ、引っ張る力が強ければ強いほど締りが固くなるロープの結び方を実践してみた。
余ったロープを束ねて持ち、窓から投げ捨てる。心配なのは長さである。余分に長く作ったつもりだが、はたして足りるかどうか。不安

を感じながら覗いてみれば、ロープの先が夜風に揺られて、ひらひらと空中を泳いでいる。
「うん、届いてないな……」
ロープの先端と地面がどれだけ離れているのか、ここからでは判断できない。しかも、風に揺られるロープは一秒たりとも垂直を保ってくれないので、ことさら判断がつかない。
エーテルは、ロープを握った両手にぎゅっと力を込めた。
「まあ、何とかなるでしょ……」
ロープの繋ぎ目に足を引っかけ、全身を夜気のなかに躍らせた。
細長い四肢に、経験したことのないすさまじい負荷がかかる。
しかし予想以上の重さではない。
ゆっくり、ゆっくり、手と足を交互に下ろして、壁伝いに降りていく。
等間隔にあるロープの繋ぎ目のコブに体重をかけることで、エーテルの膂力でも、なんとかロープを伝い降りることができる。計算通りだ。
夜風が、火照った体を冷ましてくれる。
手首と指の痛み以外は、今のところ大したことない。
「うん。いけそうっ」
なるべく下を見ないようにして、ひたすら同じ動作を繰りかえす。途中、強い風に煽られたロープが振り子のように大きく揺れた。危うく絶叫しかけたが、じっと堪えて、無心で手足を動かした。
冷たい風にさらされていてるが、エーテルの体は慣れない運動ですでに汗だくだ。ドレスが体に張り付いて不快感が募るし、前髪が顔にひっつくのも鬱陶しい。
意識しだすと止まらなくなる。
「……も……もう少し、はぁ……薄いドレスにすれば……はぁ……よかった……ていうか体力ないな私……」
時季を考えれば薄着というのも考えものだ。だが、例えば薄いドレスを着て、羽織りものはあらかじめ窓から投げておく。それを下に着いてから改めて着用するなど、やり方はあったはずだ。頭のなかで後

悔の念が渦巻いた。
（……もう遅いか）
引き返すわけにもいかないのだから、あとはこのペースを維持しながら降りていくのみだ。
（今ってどの辺りかな？）
ふと気になって、視線をそっと真下に落とす。そして愕然とした。
遠くに見える地上との距離に、エーテルは絶望した。
（まさか！）
――と、思って見上げてみれば、開け放たれた窓は悲しいほどに近かった。
「なんで……私の部屋は……はぁ……こんな高いとこに……あるのよっ」
高所から望める町並みなどに興味はない。そんなものは百害あって一利なしだ。もちろん脱走を防ぐためだと言うのなら効果はテキメンだが。
日頃から使っていない筋肉は、もうすでに限界が近い。握力の抜けた両手が、禁断症状でも出たのかというくらい震えている。ロープを離さないでいるのがやっとだ。
そして、ここにきて痛恨の誤算が発覚した。
ドレスの生地で編んだロープは、強度に関しては申し分ない。
だが、とにかく滑る。
エーテルが気づいた頃にはもう、手に汗をかけばより強い握力が求められ、そのせいでまた汗をかくという悪循環が始まっていた。この手を離してしまえたらどんなに楽か。自暴自棄になりかけていると、さらに事態は悪化する。
ビリリリッ！
死の宣告にも等しい音が、ロープの布ごしに聞こえてきたのだ。
「嘘っ!?」
エーテルは青ざめた。
（やばい！　こんなとこから落ちたら死ぬっ！）
お手製のロープは、強度も不十分だった。

一刻も早く降りなければ！
最悪、落ちても死なない高さまでは降りなければ。
エーテルは焦った。
焦りは、いつだって失敗の素だった。
急ぐあまり、足下の確認を怠ったのが、少女の運の尽きだった。
繋ぎ目のコブを踏んだつもりの足が、空を切った――。
「あっ」
ほんの刹那の浮遊感、一瞬遅れでやってくる後悔。
片足を踏み外せば、片足にしわ寄せが行き、その足が空を切れば、次は両手に回ってくる。滑落は免れえない。取り返しのつかない大失態だった。
ロープが猛り狂う竜のように手の中を滑り抜けていく。コブの上を通過する度に、手に強い痛みと衝撃が走る。落下を止めようと力を込めるが、一度ついてしまった勢いはそう簡単に消せるものではない。
城壁が目まぐるしく上に遠ざかっていく。いくつもの窓が通り過ぎていく。
このままでは死ぬ。
「……死んでたまるかぁぁ！」
エーテルは、ほぼ反射的にロープに抱きついていた。
ズルズルと上に滑り抜けていくロープに、あらん限りの力を振り絞ってしがみつく。それでも落下は止まらない。止まらないが、心なしか速度が落ちてきている。
エーテルは死に物狂いでロープを抱きしめる。
上方に流れていく景色がいくらか緩やかになっていき、体にかかる衝撃も弱まりつつある。
希望の光がさした。
こういう時に影を落とすのが、絶望というものなのだ。
――ロープが足りていないことを完全に失念していたのだ。そう、ロープは地面まで届いていなかったのだ。重大な問題を先送りにしたエーテルの自業自得である。

「うああっ!?」
突如、足が宙に浮いて思わず叫ぶ。
この速度で、地面との距離も分からないまま落下したら、無事で済む保証はない。そんなことにまで頭が回る状況じゃなかったが、エーテルは何も考えず、ありったけの力でロープを握りしめていた。ロープの先端には、余った布をまとめた膨らみがあった。
残る力をそこにかけたのだ。
落下は止まっていた。

茫然自失の少女が、さもロープの延長部分かのように、力なくぶら下がっている……。
冷たい夜風が、少女の体を揺らして遊ぶ。
限界などとうに超えている両腕は、もはや少女の意思では動かない。一体なぜつかまっていられるのか。人体の不思議だ。
「あぁ……助かっ……」
ビリビリビリ!
「あ」
限界を超えていたのは、エーテルだけではなかった。

花壇のクッションに受け止められたエーテルは、花々に埋もれたまま三角座りでもしながら、もうしばらくあの綺麗な月を眺めていたいなあという気分に駆られていた。無の境地に至ったとでも言わんばかりの落ち着きぶりである。
千切れたロープの、残骸の連なりが、頭上に舞い落ちた。所々が裂けて生地がはみ出している。よくもまあこんなもので、無事に降りられたものだと、我ながら関心してしまいそうになる。
「どーして私ばっかり、こんな目に……」
白い息を吐いて、夜の空に放りなげると、仰向けになる。肉付きの薄い背中と小ぶりな頭蓋を、花びらがそっと押し返す。
「はぁー……もう、動きたくない……」
体の下でへしゃげた花が香りを立ち上らせている。周りを囲む茎

と花弁が、視界を遮ってほどよいブラインドになっている。これは寝れる。そう確信した時、ふと、花の先にかかったロープが、赤茶けていることに気がついた。
「……んー……？」
何だろう。赤茶けたロープを取ろうと手を伸ばしたら、当然、自分の手が視界に映った。
――真っ赤だ！
手のひらが、湯剥きされたトマトみたいだ。肘から手首にかけて、皮がキレイにめくれ上がっている。
「……ああ……もう駄目……」
どおりで腕の感覚がないわけだった。思うように動かせないのは、脱臼でもしているから？
ここまでくると他人事のように思えてくる。
手順を踏むなら次はこうだ。
日中エミルが周囲に気づかれぬよう、庭の茂みに鍵付きロープを忍ばせてくれているはずなので、それを使い塀を越えて、そのまま城下町にあるエミルの住居に転がり込む。その後はしばらくそこで厄介になる。そういう手筈だ。
ここで一つ確かに言えるのは、今の彼女に、あのそびえ立つ壁を登る余力なんてないということだ。
「ちょっと休もう」
茎と花弁に覆われた星空には、透き通るように美しい月が浮かぶ。あれは夜空にぽっかりと開いた穴だ。あの穴をくぐった先に、誰も知らない夢の世界が広がっているのだ。そんな気がした。
少女の頼りない体を、揺蕩感が包む。
「作戦失敗だ……私はかよわい女の子だぞ……あんなの登れるわけないだろ……うんまあ……それが分かっただけでも、よしとしましょう……ふう、次はどうしようかなあ……ていうか、まず牢屋から出してもらえるかしら……一生、あそこで読書して過ごすとか……そんな馬鹿な話ってないわ……うん、何も思いつかないわね……ああ疲れた……動きたくなあい……」

声が少しずつ暗い水の底に沈んでいく。
絵本を読み聞かされる寝入りの子どものように、エーテルの顔つきは穏やかだった。
このままここで眠ってしまえば、朝には使用人に見つかって、また懲罰房に叩き込まれるのだろう。前の監禁が三十日間だったので、今回はその二倍、いや三倍の、九十日間か――切りの良いところで百日間かもしれない。解放されたときにはエミルはいないだろうし、エーテルの自由もどこまで許可されるか分からない。この脱獄が、未遂で終わることのデメリットは、挙げていけば切りがない。
しかしながら睡眠欲とは、時にあらゆる恐怖を凌駕する。すべてを承知の上で、エーテルは眠りに就こうとしているのだから。
「もういいやあ……」
すうっと瞼を閉じる。
意識の奥深くへと堕ちていく心地良さに、身を委ねる……。

Chapter4
chapter 4 ― 1 犬っぽい

目が覚めたら、エーテルは暖かな毛布にくるまれていた。
普段寝ているベッドに比べたら固いが、懲罰房の寝台よりは柔らかい。でも、このくらいのほうが好きかもしれない。そう思う。部屋に漂う湿った木の香りが、どこか心を落ち着かせてくれた。
鳥のさえずりが聞こえる。木造の窓枠からは光がさしている。部屋は薄暗いが、外は朝なのだろうか。
(……どこだろう?)
天井の木目をぼうっと見上げながら、体の両側にはみ出した毛布を、きゅっと抱き寄せる。この温もりを手放すのは少しだけ惜しい。
けれど毛布を抱き寄せようとしたとき、違和感を覚えた。腕の感触が変だ。何か膜のようなものを隔てている感じだ。そうして昨夜の記憶が蘇る。窓から降りようとして失敗したこと。手に大怪我を負ったことも――でも、それにしたってこの感触は変だ。
疑問に思って、毛布を払いのけた。
エーテルの細い腕は、指の先から二の腕のあたりまで、包帯で覆いつくされていた。
「何よ……これ……」
彼女にこのような治療を施す者は城にはいない。ならばここは城ではないのか。考えてみればこんな部屋には見覚えがなかった。
改めて眺めると、狭い部屋だ。スペースのほとんどをベッドが占領していて、他に家具らしきものは見当たらない。扉も一つしかない。
エーテルが物思いにふけっていると、古めかしい造りの扉が、軋みを上げながら開かれた。
入ってきたのは、予想通りの青年だった。
大きなパン籠(かご)で両手の塞がった、エミルだ。
エミルは山積みのパンで前が見えていないらしかった。やりづらそうに足で扉板を押して、パンを落とさないようにか、扉の開閉に合

わせて体勢を変えながら入ってきた。
パンの山から覗いた青年の目と、ベッドでぺったんこ座りの少女の目が合うと、
「うおあっ!?」
「ひゃあ!?」
エミルは頓狂な声を上げて、パンを床にばらまいた。出しぬけに叫ばれ、エーテルもぎょっとして体を反らせる。
二人の間を、静寂が通りすぎる。
青年と少女は声も立てずに、ただ視線を交わらせる。
「……お、起きたんだね！」
「は……はい……」
こうも畏(かしこ)まられると、こちらまで緊張してくるものだ。エーテルはこの時のために用意していたセリフを必死になって探した。頭の中のどこを探しても見つからなかった。エミルとの交友関係は慎重に築いていかなければならない……。
『あのっ』
声が重なった。
「あ……すみまっ……申し訳アリマセン！　い、イカガイタシマシタカ、姫？」
ぎこちない口調は、まるで魔女に命を吹き込まれた人形が喋っているみたいだ。そんな彼がおかしくて、いつの間にか緊張が解(ほぐ)れていることに遅まきながら気づかされる。
エーテルは微笑を浮かべた。
「怪我の治療までしていただいて……感謝の言葉もございません。本当になんとお礼をしたらよいのか……」
「そんな、お、お礼だなんて！　ぼく……ワタシは当然のことをしたまでです！」
何やら取り乱して、エミルは籠に残っていたパンを一つ残らず床にこぼしていた。
糸人形を思わせる奇妙な動きでパンを拾い集める彼に、エーテルは笑い声をかみ殺しながら喋りかけた。

「お優しいんですね、エミル様は」
「ふえっ!?　や……そんな、当然です！」
　エミルは顔を真っ赤に染め上げ、逃げるように床に目を落とした。
気恥ずかしさを紛らわすように床だけを見つめて、パンを集める……
そんな悩ましい思春期の青年をエーテルはじっと見ていた。
「あの、姫様！」
「はい？」
「朝食にスープを買ってきたんです。けど、お口に合うかどうか……」
「まあっ、好きです」
「えっ」
「スープは好物ですよ。朝からいただけるなんて嬉しいわっ」
「……ああっ！　そうですか。それなら良かった！　す、すぐに支度しますね！」
　エミルはそそくさと部屋を出ると、小さな両手鍋を持って戻ってくる。その鍋を、黒い石版――加熱調理用の魔法道具（マジック・アイテム）だ――の上に乗せる。壁付き棚から木の器とスプーンを取って、布巾で食器についた埃を拭いとっていく。エーテルを待たせないよう急ぎながらも、決して雑な仕事ではない。どことなく嬉しそうにも見える。そんな後ろ姿を眺めているうち、ついあれを頭に思い浮かべてしまうのだった。
（犬？）
　もし尻尾が生えていたらきっとぶんぶんと振っていたに違いない。
そんなことを考えてから、はっと正気に戻る。
（犬はさすがに失礼でしょ……）
　こんなに尽くしてくれる人は初めてだ。なんだか面映ゆい気持ちだ。そんな気持ちを打ち消したくて、彼に話しかける。
「それにしても、どうやってあの城から？」
「あぁ、塀を超えるのには縄梯子を使ったんです」
「まさか……私をしょってあの塀を超えられたのですか？　重くはありませんでしたか？」
「軽かったです！」
　エミルはなぜか気を付けをして、鞭にでも叩かれたような声で即答

した。
「……そ、そうですか？」
「はい！」
いきなりの変わり様に、エーテルはちょっと気圧された。だがまぁ、これも気を遣ってくれてのことだろうと、納得することにした。
「夜が更けても姫様がお見えにならなかったので、何かあったんじゃないかって、不安になって……。すみません勝手に……」
「エミル様？」
エーテルは、春先に咲く花のような微笑みを作って、頭をかたむける。謝ることなんて何もないのにと不思議を覚えたのは本心だった。わざわざ私を迎えに来てくれたのでしょう？　と。
（やっぱり、ちょっと犬っぽい）
「謝られることなど何一つないじゃありませんか。エミル様が迎えに来てくださらなかったら、きっと私、今頃はお仕置き部屋の中にいましたもの」
エーテルが屈託なく笑って、エミルが恥ずかしそうに目を伏せる。ちょうど鍋の中身がコトコト音を立て始めた。エミルは逃げるようにそれに取りかかった。スープを鍋から器に移して、そこに木のスプーンと、冷水を満たしたコップを添える……。
野菜のクリームスープだ。
上から、干し肉のチップと黒胡椒を少々散らせば、出来上がりだ。
「どうぞ」
エーテルは目を輝かせた。城の料理にはすっかり飽きてしまったので、とっても楽しみだ。
「お口に合えばいいんですが……」
町の料理人の味はどれほどのものなのか、お姫様の興味は尽きない。
目の前に置かれたスープを興味津々に見つめるエーテルだったが、スプーンを取ろうとして、自らの腕の状態に思い至る。スプーンを上手く扱えるだろうか？
（あ、そうだわ！）

自分のスープには一切手をつけず、ただ不安げにエーテルを見つめているエミルを、じっと見つめ返して一言――。
「食べさせていただけませんか？」
エミルの目が丸々と見開かれる。
「手が使えなくて」
「ああっ、そうですよね……気が利かなかったです！」
そんなことありませんよと、かぶりを振る。
「で、では……」
クリームスープを掬ったスプーンが、かすかに震えながらエーテルの口もとに寄せられる。薄紅色の唇が品のいい形に開くと、スプーンを迎え入れる。喉がこくりと嚥下の音を鳴らした。
……白色をわずかに滲ませた唇が、また開いた。
二口目が彼女のもとに運ばれる。
じっくり味わってから飲みこむと、思わず相好がくずれた。
想像していたほどのとろみはなく、舌触りの良い、薄味仕立てのスープである。朝の胃袋に染みるようだ。塩気はほど良く、野菜の素朴な甘みを引き立てる。絶妙な加減で煮込まれた野菜が、充分な食感を残しつつも邪魔にならない。
（お城の料理よりもおいしいわ！）
「あー幸せ……」
「僕もです」
「え？」
「……あっ、ああっ、違いますよ!?　今のは言い間違えですよ!?」
「まあ、そうですか？」
エーテルはくすくす笑い、また唇を動かした。
少女の口もとにスープが運ばれる。今の失言のせいなのか、さっきより震えが増しているようだ。……スープは上手く運ばれずに半分以上もこぼれてしまった。
「ごっ、ごめんなさい！」
エーテルの顎の先から胸もとをクリームスープが伝う。体にもこぼれて、瑠璃色のドレスに白い斑点ができている。

「大丈夫ですかっ!?」
エミルは慌てて布巾を取りだすと、エーテルの下唇についたクリームスープを拭いとった。そのまま首へと布巾を滑らせるものの、胸もとにさしかかると元来た道を引き返していった。勇気が足りなかったのだろうか？
小麦色の額には大粒の汗がついている。その慌てぶりが面白くてしょうがない。まだまだ、もっと困らせてみたい。こんな気分になるのは生まれて初めてだ。どうしたものか。この欲求に従ってもいいのか、逆らうべきなのか。エーテルは四秒ほど逡巡した。
「すぐに拭きます！」
ドレスを拭こうとしたエミルの手をそっと遮る。
「それには及びませんよ。このドレスはもう破けてしまっていますし、脱いじゃいましょう」
「……あ、それなら。洋服をご用意していますよ！」
彼は思いがけず得意げな声を上げていた。ベッド下の収納箱から、羊皮紙の包みを取り出すと、包装を開く。気になる中身は、赤いワンピースのフリルドレスだった。
（あ……いいかも）
「私のためにこれを？」
「姫様を一目見た時から、きっと赤い色のドレスがよくお似合いになるだろうと」
そこまで言うと、エミルは苦笑いを浮かべて続けた。
「姫様なら、どんなドレスでもお似合いになるでしょうけどね」
「……お世辞でも嬉しいです。……早速、着てみますね」
「はい！」
ドレスの肩の部分をつまんで持ち上げる。深みのある赤だ。夜の舞踏場の黄金色の灯りによく映えそうだ。もっとも舞踏会に招かれたことなどないので、本から得た知識と、乙女ならではの空想でしかなかったが。
お姫様がにこにこと褐色の美青年を見つめる。
「着てみますね？」

「どうぞ！」
お姫様がにこにこと青年を見つめる。
青年もにこにことお姫様を見つめる。
「女の人の着替えを眺めるのが、お好きですか？」
「……ふわ!?　いえっ、そのっ、違ッ！　そっ！　そんっ、そんにゃことは！」
「素晴らしいご趣味をお持ちなんですねぇ、エミル様は」
「でっ、出てますううう！」

「お待ちになって」

慌てて部屋から飛び出ようとするエミルを呼び止める。びくっと振り返った青年に、さながら悪戯っ子のように赤い舌先を見せてやった。
「ほんの冗談です。どうかお気になさらないでください」
そして呼び止めた理由を教えてやる。
「着替えを手伝ってください」
とたんに部屋が静かになった。
鳥たちの歌声が、朝のすがすがしさを乗せて聞こえてきた。
エミルは実に分かりやすく言葉を失っていた。

Ｅｘｔｒａ　ｓｔｏｒｙ　ドレスぬぎぬぎ大作戦！

エミルの目の前には暗闇が広がっていた。
仄かな甘い香りと、鈴の音のような笑い声。両手にあるのは包帯越しの温もり。
視覚を奪われると、その他の感覚が鋭敏になると聞いていたが、まさかこれほどとは思わなかった。
「エミル様、そのままこちらに」
「はい……」
手を引かれ、甘い香りのする方へと体を倒す。胸のあたりに、むにゅりとした柔らかいものが押し付けられる。吐き気すら催すほどの緊張のなか、誘われるままに、彼女の背に両手を回す……。
柔らかいものに当たらないように、体が密着しない近さを見極めて、猿みたいに手だけを伸ばす。姫の体つきが華奢であったことに、エミルは深く感謝していた。
「背中の紐が緩むと、脱がせられるようになっているんですよ」
「……そうですか」
互い違いにかかった紐を、指先の感覚だけで、一本ずつ解していく。この作業は、楽と言えば楽なほうだ。密着しないで済むから、心臓への負担が少ない。
「わあっ……！」
張りのない、どことなくわざとらしい、驚きの声が聞こえた。と、ほぼ同時に、エミルの体の前側が柔らかいもので押された。全身をえも言われぬ多幸感が包み、一瞬でそれが戦慄へと変わる。
「ご、ごご、ごめんなふぁい！」
きっと傍目には、目隠しをした褐色の青年が、美少女の清らかな体を抱きしめるエキセントリックな光景が広がっていることだろう。
「ふふ、躓いてしまいました」
「は、離れ……」
「このほうが脱がせやすくはありませんか？」
「え……」

「脱がせやすくないですか？　なら、もう少しくっつきましょうか」
「いえ、とてもヌガせやすくナリマシタ！　このままでお願いシマスッ！」
　目の前から、くすくすと笑う声がした。
「このままですね。わかりました」
　その体は、ほっそりとした体躯からは想像もつかないほど柔らかくて、気持ち良かった。間近に嗅ぐ芳香の中には、先ほど嗅いだ時には気がつかなかった、かすかな汗の匂いも混じっている。頭がどうにかなってしまいそうだ。これで劣情を抱かない男などいるはずがない。
（……駄目だ！　何考えてるんだ！）
　頭の中のエーテルを、裸にひん剥いてベッドに押し倒したところで、エミルは自らの不遜な考えを戒（いまし）めた。
　おそらく他意はない。言葉の通り、姫は着替えを手伝ってもらおうとしているだけなのだ。城の中で育ったエーテル姫は、異性というものを知らないのだ。周りに居るのは侍女ばかり。世の男たちが彼女のような美少女に、どんな感情を持つのか、彼女はまだ知らないのだ。
　その純真無垢な心を、他でもないこの手で汚すことだけはしたくない。エミルは意を決して、エーテルの体を、より近くへと抱きよせた。姫の「あっ」という声が妙に艶めかしく感ぜられたが、首を振って邪念を断ち切った。そのまま猛スピードで背中の紐を緩めていく。職業柄、手先が器用なのが幸いしたようだ。ある程度まで解（ほぐ）すと、ドレスの締まりが緩んだので、肩口のあたりをつまんで、果物の皮を剥くようにめくっていく……。
　めくれ落ちた上半分のドレスは、姫の腰のくびれに引っかかって、垂れ下がっているようだ。残るは下半分――スカートだが、姫のほうからは何も動きがないので、これを脱がすのもやはりエミルの役目なのだろう。
（……ええい、ままよ！）
　くびれの上に溜まった布を、まとめてつかむと、足もとまで一気にずらす。心拍数がかつてない数値を叩き出している。
（な、なんとかできたぞ……）

だが、まだ関門を一つ突破したに過ぎない。
額の汗をぬぐうと、エミルは一つ息を吐く。これからはドレスを着せていくわけだが、はたして目隠しをしたままで可能なのだろうか……。
「エミル様、下着もお願いします」
「あ、そうでしたね」
エミルは再びエーテルの体を抱きよせて、背中に手を回すと、下着の結合部を指で外し……
「って、えええっ!?」
一体何がどうなって下着まで脱ぐ必要があるのか！　エミルは愕然とした。愕然としたが今さら言っても遅すぎた。なんだか流れで脱がせちゃったよ！　エミルは困惑した。冷静な判断力はとうに失われていた。もうこれはそういうことか!?　このまま男女の関係に発展してしまっても良いということか？　エミルは口内の唾液をすべて飲みこんだ。
（……ってそんなワケないだろ！）
頭の中のエーテルを、シーツに押しつけて胸を揉みしだいたところで、エミルは自らの不誠実さを戒(いまし)めた。
姫様はそんなつもりで言ったんじゃない。ただ、下着を脱ぎたかっただけだ。ドレスを着替えるとき、女性というのは下着を脱ぐものなのだ。そうに違いない！　それを下心丸出しの勘違いで変な気分になって、襲いかかるなんて男としてあるまじきことだ！　そう自分に言い聞かせるエミルは、やはり冷静とは程遠い。
「し、下も……その……脱ぎますか？」
「もちろんです」
「……それも僕が？」
「え？　いえ、それはちょっと……。ああ、エミル様がしたいのなら話は別ですが……」
「ぐっ……」
「そんなに脱がせたいですか？」
「それは……その……姫様……僕のこと、からかってませんよね……

？」
「からかってませんよ？」
どことなく愉しそうな声だった。それでも疑わない。否、一度は疑った。疑ってしまった。そんな己の心をエミルは恥じた。いくらエーテル姫でも、男にパンツを脱がせらるのには抵抗があって当たり前だ。
「少しお待ちいただけますか？」
「はい……」
エミルの前でかすかに物音がする。姫自らアレを脱いでいるのだ。
（ということは、今……!?）
胸の鼓動が一気に高まる。心臓の音で彼女に下心が伝わってしまわないか不安でならない。
だが姫は何を思ったか、エミルを放置してどこかへ行ってしまった。目隠しをされて動けないエミルは、棒立ちで彼女の帰りを待つしかなかった。
「準備いたしますね」
突然、耳もとで囁かれる。
「ひゃいっ!?」
声を上ずらせて飛び上がると、愉しそうに笑う声が響いた。
エミルはそわそわしながらも、準備という言葉にはてと首を捻った。一体何を準備するのだろうか？
「手をお出しください」
「こうですか？」
ボトリ。手のひらに冷たく湿った何かが落とされる。
「それで私の体を拭いてください」
「へっ!?　何を言って……!!　えっ!?　む、無理っ!!　無理です!!」
エミルはぶんぶんと首を振る。
「このままでは、せっかくのドレスが汚れてしまいます……それに、女の子は体が汚れていると落ち着かないものなのですよ……こんなことをお願いできるのはエミル様だけですし……いけませんか？」
姫の、雨の日に捨てられた子猫のような表情が脳裏に浮かんだ。そ

してなにより彼女には男の庇護欲を掻き立てる魅力があった。
男にそんな声で、そんなことをお願いしたら、襲われてしまうよと、教えてあげるべきか、エミルは悩む。あるいはそれも純白の心にとっては不純物なのだろうか。
「……分かりました。僕に手伝えることなら、やらせていただきます」
「ではでは、早速」
歌い出しそうなくらいに、弾んだ声だった。
（……本当に無自覚なのか？）
気を抜くと心が揺らぎそうになる……。
エミルは手渡された濡れ布巾と思しきものを少し絞ってから、姫の肩のあたりにそっとあてがった。
「ひゃんっ」
「大丈夫ですか?!」
「はい……冷たくて少し驚いただけです。どうぞ続けてください」
「……し、失礼します」
肩口から肘までをゆっくりと拭いていく。二の腕や、脇（わき）の近くを拭いていると、気持ち良さそうな吐息の音が聞こえた。
腕を拭き終えると、次に待つものを想像してエミルは唾を飲む。
（――やるしかない！）
肩から首もとに、濡れ布巾を滑らせる。
まずは首周りをさっと拭き上げ、そして男子禁制の地へと下りていく――。
「あんっ、んっ……」
それはもう誰がどう聞いても完全に喘ぎ声であった。
「ごめんなさいっ!!」
谷間に差しかかっていた手を離すと、エミルは勢いよく頭を下げた。
「エミル様？」
「ごめんなさい！」
「どうして謝られるのですか？　続きをお願いします」
「はっ、はい！」

手の中ですっかり温くなった濡れ布巾を、安全な場所――胸より上の部分――にあてがう。
それをゆっくりと下ろしていくと、
「あっ、んっ……」
またしても喘ぎ声であった。
「ごめんなさい！」
反射的に手を離しそうになったが、根性で抑え込んだ。同じ過ちを繰り返すと、姫を不快にさせてしまうかもしれない。
柔らかい双丘を押しのけながら、濡れ布巾を下へと進ませる。
「あっ、はあっ……」
熱っぽい吐息が顔にかかる。
「ご、ごめんなさ――むぐっ!?」
エミルの唇が何かで塞がれた。
もしや！　と思ったが、思い浮かべたものとは触れた感じが違う。
これは包帯だ――つまりは姫の手だ。口を押さえたのは「謝らなくていいよ」ということだろうか。
エミルは生温かい濡れ布巾で、胸の麓（ふもと）の外周りを拭いていった。山の上へは行けそうもない。それだけはいくらなんでも無理なのだ。
「あっ、んんっ……」
色っぽい声が、エミルの手の動きに合わせて響く。
山頂付近を残して胸を拭き終えると、いよいよ下の方へと――さらにアンタッチャブルな領域へとさしかかる。腰から下は、未経験の青年にはどこもかしこも刺激的すぎる。
一度後ろを向いてもらい、背中からやっていこうかとも考えたが、諦めた。なんとなくだが、姫に断られそうな気がしたからだ。
生ぬるくなった濡れ布巾を――太ももから膝へ、膝から足首へ――這わせる。
「はっ、んっ……」
姫の声が艶かしく響く。
エミルは、この特殊なシチュエーションに大いに興奮しながらも、姫のおみ足を持ち上げ、指と指の間まで丹念に拭いていった。

だが足が終わると、いよいよ拭ける場所もなくなってくる。
「姫様、後ろを向いていただけますか？」
恐る恐るたずねてみた。
「あら、まだ拭いでいないところがありませんか？」
つくづく楽しげな声だった。
「でも、そこは……」
「そこは？」
血が一ヵ所に集まっていくような感覚……。
エミルは突如、眩暈（めまい）に襲われる。
糸が切れたように、体が崩れ落ちる。
「エミル様っ!?」
制御を失った体は、だが床を打つ前に、誰かに受け止められた。
何かクッションのようなものに顔面が埋もれている……。
（……息苦しい。……柔らかい。……温かい？）
「しっかりしてくださいっ！」
（……何だこれ？　なんか落ち着くなあ）
もっと奥まで顔を沈めてみる。深さは思ったよりなかったが、顔を挟むようにかかる圧力がが増した。
「……エ、エミル様？」
（なんか変だな……この位置はおかしいよな……声が上から聞こえるし……まさかっ!?）
――しゅるる。
エミルがすべてを悟った直後、神の悪戯としか言いようのない偶然によって、目隠しの布の結び目が解（ほど）けた。
闇に慣れた目に飛び込んでくる、朝の光。
そして彼女の裸。
――ぶふう！
という効果音こそなかったが、エミルは鼻から派手に血を吹いていた。
「エミル様っ!?　エミル様ーっ!?」
「……ぐふっ」

麗しの姫に叫びかけられながら、エミルは意識を手放した。

chapter 4 ― 2 誰よヒルダって

活気のある赤煉瓦の通りを、フードをかぶった男女が歩く。
男のほうは柔らかな褐色の肌と、日に焼けた金髪。どことなく居心地が悪そうだ。
女のほうは日に当たっていない白い肌と、茶色のボブカット。両側の商店をひとつひとつ見回している。
茶色のボブカットは、エーテルがエミルに用意するよう依頼していた物の一つで――かつらだ。
ゆるくカーブしたボリューミーな髪は、小さな顔の面積をより狭め、つぶらな眼をいつも以上に際立たせている。
「エ、エーテル様、くっつきすぎでは……」
「カモフラージュですよ」
まず間違いなく、この町にも多数の追っ手が放たれているだろう。
「私が男の子と歩いてるなんて、きっと誰も夢にも思いませんから」
「だとしても、こんな大通りを歩くのは危険じゃないですか？　情報を集めるだけなら何もこんな……」
「情報収集のことはいったん忘れましょう。あまり嗅ぎ回るとそれこそ危険ですもの」
魔王ディオリスについて情報を得ることが、今回の主目的だ。ただ手始めにエミルに聞いてみたところ、ディオリスに関することでエーテルの知らない情報というのは、意外にもほぼないということが分かった。書物から得られる範囲の知識なら、すでに有している。わざわざ危険を冒してまで他人に聞くことはない。
「当てはあるんです。そこへ行けば何か手がかりがあるかもしれません」
「なるほど。では急ぎましょう……この通りは人目につきますし、ここは迂回して……」
「わっ！　何かしらあれ！」
エーテルは目に留まった『ベリー飴』の店へと、エミルの手を引っぱって駆けだした。

「ああちょっと！　聞いてるんですか！」
エミルの呆れ声を無視して、エーテルは店主に話しかける。
「おいしそうな飴ですね！」
「へいらっしゃい。ベリー飴おいしいよ！」
「五つくださいな！」
「まいど！」
店主が串にささった紫色の飴を、袋に詰めはじめる。エーテルは振り返って、にこにこ顔でエミルを見た。エミルは溜息をつきながら財布を取りだした。

×　　×

通りに面した公園の噴水の縁にかけると、エーテルは一も二もなくベリー飴を取り出して、口に突っ込んだ。
「ふあ（わぁ）、はふぁい（あまーい）！」
飴を口に入れたまま、こもった声をあげた。
噴水の外に投げだした足を、ぶらぶらと遊ばせる。残り四本の串が入った袋を大切に抱えていると、隣から視線を感じる。
「奔放ですね、エーテル姫は……」
エミルが呆れたようにこちらを眺めていた。エーテルは飴を口から抜いて、舌でぺろぺろと舐める食べ方に切り替えた。
「もしかしてエミル君、怒ってますか？　着替えを手伝わせたこと」
「え、そんなことは……そんなこと……は……」
エミルの顔がみるみる赤くなっていく。さっきのことを思い出してしまったのだろう。
「あはは、ごめんなさいっ。あれはやりすぎましたね」
「やっぱりからかってたんですか!?」
「それはもう。だって、ほら」
包帯でぐるぐる巻きの左手を、ぱっと表に返す。
「手……使えてますよね。それはさっきからちょっと気になってましたよ……」

「エミル君がかわいくて、つい」
悪びれもせず、エーテルはくすくす笑った。エミルが諦めたように肩を落としていた。
「エミル君も食べます？」
「いただきます……」
まあそれ僕が買ったんだけどね、という言葉を飲み込んだのだろうエミルに、エーテルは好奇のまなざしを向けて、
「はい、あーん」
「……じ、自分で食べれますよ！」
「さっきのお返しです。はい、あーん」
しぶしぶ口を開けたエミルに、ゆっくりとベリー飴を近づける。
――ぱくり。口を閉じたエミルはうなった。閉じる直前、飴は口の外へと飛び出していた。
「うえっ？」
「くふふっ」
手つかずのベリー飴を持って、エーテルは笑いをかみ殺していた。
「姫様っ、食べさせてくれないんでしゅ……むきゅっ」
今度は、ベリー飴をエミルの口に突っ込む。
「ひょっほ、ふぁふぃふるんふぇふか！」
「くく……っ」
エーテルは笑いを堪えるので精一杯だった。
「まだ……ふふっ……まだまだありますからねっ、ベリー飴は。さあ、エミル君、あーん」
袋から飛び出ている三本の串を見せつける。
「ふぉっ!?　ふふぃへふぉっ!?」
まるで命乞いでもするように首を振るエミルに、エーテルは次なるベリー飴を手にして、にじり寄る。
「ふふふふ……」
「んっ、んーっ!!」
「ふっふっふ！」
「んーっ!?」

傍(はた)から見れば、これも仲むつまじい恋人たちの光景なのだろうか。少なくともこの公園の景観から見れば、そうなのだろう。

×　　×

リハネスの外延部にある、ベルフォス教会。
エーテルとエミルは身を寄せ合って、細い路地の影から教会敷地の入口を窺う。道幅は広いが往来の少ない通りには、視界を遮るものが何もない。だからこうして隠れなければいけなかった。
――だがそもそもなぜ隠れるのか。その原因たるものが二人の目線の先にある。
教会正門の付近に、頑丈な体つきの男たちが群を成していた。服装は一般人のものだが、おそらく公爵家の兵士だ。
「姫様……あれって？」
「追っ手でしょうね」
エーテルは溜息交じりに答える。あの書物庫での一件以来抱えていた不安が、的中したようだ。彼らはエーテルを懲罰棒に長く閉じ込めはしたが、彼女がどの書物を盗み読んだのかまでは問いたださなかった。加えてアリシアとの一戦で書物の多くが消失したこともあり、真実は闇の中に葬られたものとエーテルは楽観していた。が、ここに見張りが置かれたということは、エーテルが史書を読んだことはやはり疑われていたのだ。
「……引き返したほうがいいのでは？」
耳もとの不安そうな声が、選択を迫る。
ここでもし見つかれば、彼らの疑いは確信に変わる。それだけは避けたいところだ。
聞かれるまでもない質問だった。
「一度引いて、夜にまた来ましょう」
「忍び込むんですか？」
「はい」
当然だろうとばかりに答えると、エミルは苦笑いを浮かべていた。

何だか、いろいろと諦めたような笑い方だった。
「そうと決まればデートの続きです、エミル君」
「デ、デート……」
エミルがうつむいて頬を赤らめる。ごにょごにょと何やら小声で呟きはじめる。
「ほら行きますよ？」
「あ、はい！」
エーテルは彼の手を取って、教会とは反対方向に歩きだした。教会を後にして市街の方へと歩いていこう――と、したが。
「そこで何をしているのですか？」

背中ごしに声をかけられる。
『ひゃあっ!?』
悲鳴が重なった。驚きのあまり、一瞬、呼吸の仕方を忘れる。体が動かない。そうも言っていられない。すぐに振り返って弁明をしないと、余計に怪しまれてしまう。できるだけ自然な動きで首をゆっくりと後ろに回す……。
二人を呼び止めたのは、銀づくめの女だった。銀色の髪。白銀の肌に、銀灰の瞳。そして銀製の騎士の正装……。
（アアッ、アリシアアアアッ!?）
最も遭いたくなかった女の登場は、唐突すぎた。なけなしの理性はいずこかへ消し飛んだ。
エーテルは即座に走りだしていた。本能の域からの判断であった。
「うえ!?　ヒッ――」
同伴者から素っ頓狂な声が上がったが、無視して走る。手を繋いでいた彼も当然、走ることを強要されたのだ。説明は後ですればいい。今はとにかく逃げの一手だ。
そんな二人が走った距離は、彼女らが実感するよりもきっともっと短かっただろう。おそらく、それは数メートル単位の話だ。
着ていたローブの首根っこをつかまれ、走っていた勢いで首が絞

まった。
『ぐぇっ！』
蛙の鳴き声のような悲鳴が上がる。これも二人同時だった。
げほげほと咳き込んでいると、申し訳なさそうにアリシアが話しかけてきた。
「怪我はないですか？　手荒な真似をしたことをお詫びします」
引っ張られた衝撃でフードが外れてしまった。顔を隠すわけにもいかず、エーテルは目を伏せた。
「何するんですか！」
エミルの抗議はもっともだった。
「申し訳ありません。逃げられるとつい捕まえたくなってしまって」
アリシアは眉をハの字にゆがめながら肩をすくめた。
（はた迷惑な習性ね！）
「僕たち、急いでいるので！」
どことなく芝居がかったエミルの剣幕を、アリシアは余裕の笑みで黙殺した。
「お伺いしたいことが一つあります。……今日、この近辺で、薄紫色の髪のかわいらしい少女を見ませんでしたか？　歳は十七で、背は少し高めです。細身で、顔立ちは非常に整っています。声は高めで、細いくせに胸だけは生意気にけっこうあって……」
アリシアの止めどない語りに、理解が追いつかず、エーテルはぽっかりと口が開いたままになった。ふとそれに思い至り、頭上に手を伸ばしてみる。すると、自分のものではない髪の、不自然な感触がある……。
（私の正体に気づいてないのかっ!!）
そういえば先ほどからずいぶんと他人行儀な物言いだ。
フードと一緒にカツラも取れたと思っていたが、そうではなかったようだ。まさに不幸中の幸いである。
「いえ、見てませんけど……」
エミルがおそるおそる答えると、アリシアはそうですかと頷いた。
「わかりました。では念のため、あなたがたのお名前を聞かせてもら

えますか？」
「……名前？」
　エミルの声が実に分かりやすく強張った。
　パートナーの大根ぶりにエーテルは少しだけ苛立った。
「えっと、それは……」
「先ほどあなたは、ヒッ、と言いかけましたね？　つまり、そちらのかわいいお嬢さんのお名前は、ヒから始まるということですね……」
　うんうんと頷きながら語るアリシアは、この状況を楽しんでいるように見えた。
　エミルが目配せをしてくる。先ほどの失言を謝りたいのだろうが、そういうことは後にしてもらいたい。アリシアは鋭い女だ。ここからの挙動には細心の注意を払うべきだろう。
「あるいは……そうですね……敬称、とか？」
　胸がドクンと波打つ。
「頭に〝ヒ〟がつく敬称ですか……うーん、思いつきませんねえ」
　アリシアが顎に手をあて考え込むポーズをする。
「お嬢さんは心当たりがありますか？　頭に〝ヒ〟がつく敬称」
　いきなり話を振られ、心臓が口から飛び出そうになった。声を聞かれたら正体がばれるかもしれなかった。だからといって、ここで無言を通すのも無理がある。頭が上手く回転しない。
「さあ、騎士様……私にもさっぱりですわ」
　声を変えたつもりだった。
「私はヒルダといいます。彼はブレントです。お答えしましたのでこれで失礼いたしますね。行きましょう、ブレント」
「ああ、最後にもう一つだけ……ここで何をしていたのですか？」
「……男女が暗がりでしていたことを、聞くのは野暮ではありませんか？」
「なるほど」
　アリシアは軽く頭を下げると、にっこりと笑った。
「お楽しみ中でしたか。お邪魔でしたね」
「ご理解いただけたようで何よりですわ。それでは。……行きましょ

う、ブレント」
「……あ……うんっ」
見れば、アリシアは人当たりの良さそうな笑みを浮かべている。どうやら見送る構えを取っているらしい。
――上手くごまかせた？　もしそうなら奇跡的だ。自分を褒めてやりたかった。
だがこれ以上長引けば次の質問が来かねない。そうなればきっとボロが出るだろう。
エミル改めブレントの手を引きずって、エーテルもといヒルダは足早にその場から歩き去った。
両手の包帯をまったく隠せていなかったという失態には、後になって気がついた。

×　×

表通りに構える『金のこぶた亭』は、名のある交易商や隣国の貴族ご用達の高級宿だ。四階建ての大きな建物で、一階部分のレストランは宿泊客以外でも利用できるようになっている。
屋内は広く、うす暗い。客の入り具合は、席と席の間に空席を挟むという具合であるが、席数を考慮すれば、なかなかの賑わいぶりだ。
そんな店内の壁際、奥まったところに置かれた二人がけの席にて、エミルと町娘に変装したエーテルは夕食を取っている。豚肉をトマトで煮込んだ料理を、至福の表情で口に運ぶエーテルと、ガラスのコップからちびちびとワインを飲むエミル……。
「おかわりをお持ちしました」
恰幅の良いウェイターが、空になった目の前のグラスに、どす赤い液体を注いだ。エーテルは待ってましたと、たった今ワインが注がれたコップに手を伸ばした。
あの後、教会から戻ったときは意気消沈としたものだったが、表通りに連なる店々によってエーテルの心はすぐに塗り替えられた。それからは追っ手のことなど忘れて、すっかり日が暮れるまで町を散策

したわけだ。エミルの再三にわたる忠言を無視して。
「ヒルダ……飲みすぎだよ」
向かいの美青年が心配そうにこちらを見ている。テーブルには豚のトマト煮以外にも、パンやチーズやグリルが置かれている。そのほとんどに手をつけず、エミルはただただエーテルの方を見ていた。
「もうっ、何回も言ってるのに、どうして名前で呼んでくれないの？」
「だ、だからヒルダって……」
「エーテルっ！　私は、エーテルっ！　誰よヒルダって！」
「ちょっ……声大きいっって……」
エミルがきょろきょろと辺りを見回す間に、エーテルはワインをまた少し口に含んだ。
「だいじょーぶですよ。どうせ私のことなんて誰も知らないんだから」
「僕は知ってたよ？」
「……それはエミル君が変なだけ……」
「変って……」
「……どうせ悪い噂でしょ？」
「それは……」
二人がけの小さなテーブルに、沈黙が降りる。
とたんに周囲の話し声が大きくなる。だがその会話の内容までは聞こえてこない。この分だと、こちらの会話も聞かれる心配はなさそうだ。
「あのさ……」
「ねえ」
沈痛な空気に堪えきれなくなったエミルが何かを言おうとした時、エーテルは意図してそれを遮った。
「エミル君も、私のこと嫌い？」
酔いの力を借りないとできない質問だった。
「そんなことないよ」
――即答だった。
エミルのまなざしは真剣そのもので、まっすぐエーテルに向けられ

ていた。
「そっか……ふふ……そっか……」
「……エーテル？」
「ねえ……。私、少し酔っちゃったわ」
「飲み過ぎだよ。そろそろ帰ろう」
「おんぶして」
　エミルの肩ががくっと落ちた。それから満更でもなさそうな苦笑いが、持ち上がる。
「はいはい……仰せのままに、お姫様」

chapter 4 ― 3 辺境で暮らそう

夜の町を歩いて、二人は慎ましい住居に帰り着いた。
人通りが消え失せた夜半の町――男の子に背負われて――夜気のなかを行くのは、彼女にとっては冒険だ。だから、到着してしまったという、名残惜しい気持ちも少しはある。
建てつけの悪い扉を鳴らしながら中に入ると、エーテルはゆっくりベッドの上におろされる。勝手知ったるエミルがどこからか火打ち石を出してきて、蝋燭(ろうそく)に火をつけた。
「お酒はよく飲むの？」
「初めてよ。お酒って楽しいね」
「そっか」
しばし心地の良い静寂がおとずれる。エーテルは体を起こすと、足を床におろしてベッドに腰かけた。エミルが向かいの木箱に座っていた。
「エミル君と飲んだからかな？」
「ど……どうかな」
（ふふ、照れてる照れてる）
また短い静寂がやってくる。エミルは蝋燭(ろうそく)から顔を上げると、小さく首をかしげた。
「今日はもう寝るよね？」
「ええ、そうね」
「それを聞けて安心したよ」
わざとらしく、ふうと息をつくエミル。
「教会のことでしょ？　あれはもういいの。今朝はああ言ったけど、あそこにアリシアがいたということは、私の考えが見透かされてるってことだから。行ってもどうせ捕まるわ。きっとこの場所だって、あいつはすぐに調べ出すでしょう」
エミルの驚いた顔が、蝋燭に照らされていた。
「……アリシアって、僕たちを引きとめた？」
「そう。私のお目付役なの」

ベッドに腰かけたエーテルと、木箱の上に座ったエミルの間の、蝋燭の火が、物言いたげにゆらめいた。深刻そうなエミルの顔が、照らし出されていた。言葉に詰まっているようだ。
そんな彼に告げることがある――告げないと先に進めないことが。これも計算のうちだと、自分に言いきかせながら、エーテルは深呼吸をした。
「エミル君。私はあなたといると楽しいみたい。だからさ……」
一拍の間をおく。これも演出だ。
「私のものになってよ」
「……え？」
時間が止まったような顔をするエミルから、エーテルは居たたまれなくなって目を反らした。
だが次の言葉はぽつりと、彼の口から零れでていた。
「僕でよければ」
――またまた静寂がやってくる。嬉しくてこそばゆい、そんな静寂が。
にやけだす顔を必死に抑えて、冷静を装った。こういう時、プライドというのは邪魔で仕方がない。顔の火照りは、酒のせいだけじゃなさそうだ。
はにかみ笑いを浮かべたエミルが口を開く。
「……ねえ、これからどうするの？」
「このままどこか遠くへ行って、二人で暮らすの」
「……え？」
エミルの表情に影がさしたような気がした。
「し、心配しないで。私、魔法が使えるの！　魔物が出てもやっつけられるし、お金だって生活に困らないくらいは稼げるわ」
言葉が返ってこない。不安で胸が押しつぶされそうになる。
「ここにいたら私はいつか連れ戻される……。そうなる前に逃げない

と駄目なの。エミル君がついてきてくれたら！　私は……」
向かいの暗闇のなかに、悲しげな彼の顔が浮かんでいた。
「ねえ、何か言ってよ……」

「ごめん……」

彼の声が、ぽつんと水滴のように聞こえた。
じわりと心に染みを作るみたいに言葉の意味が広がっていく。
「僕は、まだ修行中の身で……」
エミルはうつむいて、絞り出すような小声で、そう言った。
蝋燭の火がゆらめいた。
「そう、だよね……」
エーテルもうつむいて、消えてしまいそうな声で囁いた。
「私より、夢のほうが大事？」
言ってから、自己嫌悪した。
思いがけない言葉が出てしまった。
できることならば、エーテルは発言を取り消したかった。そうすれば、彼の返答を聞かなくて済んだのだから。
「……そうなのかもしれない」
その時、確かにエーテルのなかで何かが堰（せき）を切った。心の鎧が外れたのか、あるいはただの酔った勢いか。
「――うっ……う……」
包帯にくるまれた手をベッドに叩きつける。
「うわぁぁぁぁぁぁん！　エミル君のばかぁぁ！」
毛布をつかんでエミルに投げつけた。
「私のものになるって言ったのにっ！　どうしてついてきてくれないのよおっ！」
「ごめん……」
「謝ったって許さないわっ！　ばかっ！」
手近ににある物を片っ端からエミルに投げつけていく。幸い、怪我をさせるような物は何も置いていなかった。エミルが隣に腰かけて

エーテルをなだめ始めると、怒りはむしろ増した。至近距離にいる彼を、これでもかとグーで叩く。
それでも彼は、我慢強く謝りつづけていた。

×　　×

蝋燭の火はいつのまにか消えていた。泣き疲れたエーテルは、ベッドで横になった。
「……後悔しても遅いんだから」
ふてくされてそう言った。
腕に巻いた包帯で目をこする。
「後悔……すると思う」
「なにそれ。エミル君のくせに……」
口を尖らせて壁側を向く。
そっと肩に毛布がかけられた。エーテルは投げやりになって目を閉じた。エミルがまた「ごめん…」と呟いたが、聞こえないふりをした。
ぱらぱらと降りはじめた夜雨が、薄っぺらい屋根を叩きだした。
どこかで犬の遠吠えが響いていた。

chapter 4 ― 4 私じゃない

エーテルが目を覚ましたとき、外は夜だった。てっきり翌日の夜が来るまで寝過ごしたのかとも思ったが、疲労の回復具合からしてそれはないと考え直した。

酔いはすっかり醒めていた。

足もとを見ると、エミルがベッドに寄りかかって眠っていた。

半開きになった窓板の間から月の光がさしこんで、穏やかな寝顔が瞳に映し出される。

「……うああ……恥ずかしいいい……」

燃えるような恥ずかしさが込み上げてくる。

「あんなの私じゃないっ……」

足もとの寝顔を見ていると、自らの晒した醜態が思い起こされた。

あれじゃまるで恋する乙女のようじゃないか。脳裏によぎった「恋する乙女」という決まり文句を、エーテルはすぐさま振り払った。そんなはずがない。エミルの存在はあくまで作戦の一部に過ぎない。目的達成のための足がかりに過ぎないのだ。

「ああもう！　忘れましょう」

仕切り直すようにパンと頬を張って、枕を持ち上げた。

かわいらしい、いや、憎らしい寝顔をめがけて、枕を投げ――ようとしてやめた。

代わりに、自分にかかっていた毛布をかけてやった。

（……作戦変更だ。日が昇る前にどっかへ逃げてしまおう）

投げつけるのをやめた枕を適当に放って、エーテルはこれからのことを思い巡らす。行き先をどこにするかが悩みどころだった。

（いっそ教会に忍び込んでみるのもいいな……）

ふと、そんな考えが頭に浮かぶ。

何だかんだ言っても、一人で国境を超えるほどの勇気はない。町の外は魔物が出るし、野盗も出る。彼女のようなうら若い女がたった一人で歩くのは、猛獣の檻のなかに新鮮な肉を吊すに等しい行為だ。そして何より――

（エミル君とは気まずいし……）
――これ以上エミルと顔を合わせるのは避けたかった。
すうすうと寝息を立てる小麦色の彼に、苦々しい視線を送る。人の心とは分からないものだ。魔法のように操れはしないし、相応の褒美がないと支配もできない。エミルならきっとついてきてくれると信じていたが、見込みちがいだったのか。
（行こう……）
エーテルは決心した。

×　×　×　×

字数稼ぎのための人物紹介２（読み飛ばし推奨）

●エーテル
身長１６３ｃｍ
体重４４ｋｇ
髪⇒　薄紫
瞳⇒　紺碧
（長所）
隠れ巨乳
（短所）
Ｓっ気がある
ワガママ
（私見）
お姫様っぽくない。

●アリシア・アーク
身長１６９ｃｍ

体重５３ｋｇ
（長所）
強い
（短所）
貧乳
つかみ所がない
（私見）
今のところエーテルよりもヒロインっぽい？

●エミル・ヴァレル
髪⇒　金髪
肌⇒　褐色
（長所）
将来有望
（短所）
優柔不断
（余談）
登場させる予定のなかったキャラです。もともとエーテルの脱走をサポートするのは、御者の男の役割でした。ちなみに御者の男はエミルほど良い奴ではなく、エーテルの体が目当てでした。

chapter 4 ― 5 行かせてよ

「やっぱりいるし……」

ニガムシを噛みつぶしたような顔で、エーテルはそう呟いた。

静まりかえった中心街を突っ切り、ベルフォス教会のある通りまでやってきたエーテルは、教会の入口に見張りがないことを確認してひとまず安堵した。そのまま夜盗のごとく門をよじ登り、教会の正面扉に鍵がかかっていないのを発見して、嫌な予感がした。

そうっと扉を開くと、嫌な予感は的中した。神にも祈る気持ちで月明かりの礼拝堂を一目に見渡せば、長椅子の最前列に人影が……。

「来ましたか」

エーテルの沈んだ声に、誰かの声が返される。

長椅子の背もたれから伸び上がった影が、そのまま通路に出ると、幽鬼のように揺らめいて少しずつ鮮明になっていく。こちらにやってくるのは一体誰か。そんなのは問うまでもない。

「アリシア……」

月明かりのもとに現れたのは、もはや見飽きた銀髪の女だった。服装は珍しく騎士のものではない、ゆったりとした婦人服だったが、色調はやはり銀。

まるで自分がここにいるのが当然とでも言いたげに、アリシアは笑って首をかしげる。実に白々しい態度だ。

「お戻りですか、姫？　思ったよりも早かったですね」

「戻るつもりなんてない……」

「ほう、こちらへは捕まりに来たのではないと？」

「お願い……。見逃して」

アリシアは少し驚いた様子だった。それから困ったように首をふる。

「姫。残念ですが、魔王ディオリスが殺された拷問部屋は、現在は取り壊され、ただの倉庫になっているそうです。ここにはもう何もありません」

「……やっぱり知ってたのね。あの日誌を、私が読んだこと」

「ええ、まあ。確信はありませんでしたが」
ゆっくりと歩いてくる。
「けど私は信じていませんよ。あなたが魔王の生まれ変わりだなんて」
エーテルは、アリシアの真意を測りかねた。
「私は一度、死んだのよ？」
「それは存じております。まだ幼かったあなたが疫病に犯されたとき、私は侍女としてユスティヘル家に仕えておりましたからね」
初耳だった。アリシアの経歴に興味などなかったが、あまりにも意外だった。
「なら……」
「いいえ、あなたは公爵様が恐れているような、魔王の宿主などではありません。あなたは、もっと……そう、もっと特別な存在です」
「アリシア？　あなた変よ。根拠があって言ってるわけじゃないんでしょ」
「まあ、根拠はないですね」
月の光のなかでアリシアが笑っている。つくづく嬉しそうだ。その笑いに悪意がないということくらいエーテルにだって分かる。
溜息を一つ落として、疲れた声を絞りだす。
「いいから、見逃して」
「なぜです？　この先には何もありませんよ？」
「だったらいいでしょう。行かせてよ」
「駄目です。城へ帰りましょう」
「嫌よっ！」
声が礼拝堂に反響した。張り上げた音は、湿った夜の空気を震わせて、どこへともなく呑まれて消えた。暗い礼拝堂が静謐さを取り戻す。
「待遇が不満ですか？」
「あっ――」
愚問すぎて、一瞬、何を聞かれたか信じられなかった。
「当たり前でしょうっ!?」

激情に身を任せると、わずかに涙が込み上げてくる感覚があった。
「みんな私を嫌うのよ!? まともに相手もしてくれない！ 外にも出してくれない！ やっと原因を突き止めたと思ったら……前世がどうだったなんて不確かなもので、どうしてここまでされなきゃいけないの!?」
涙を目に滲ませはしても、エーテルは決して泣かなかった。日に二度も泣くなんてあり得ないことだ。再び静かになった屋内に、エーテルの乱れた息遣いだけが響く。
二人とも少しだけ沈黙を守った。
「……ねえ……アリシア。私には知る権利があるでしょう」
「それとこれとは別の話です」
少女の叫びにまるで耳を貸さなかったような、言い方だった。
「どうしてッ、私の邪魔ばかりするの！」
「それが私の仕事だからです」
アリシアの声が冷気を帯びた。取りつく島もなかった。これ以上の話し合いに応じるつもりもないようだった。
「そう……ならもういい。力尽くでも通してもらうわ」
「おや、穏やかじゃないですね」
鼻で笑うアリシアを、エーテルは睨みつけた。
「その余裕はどこから来るの？ 今日はあの卑怯な鎧は着けてないようだけど？」
「嵩張るので置いてきました。まあ鎧などなくとも負けませんよ」
「……言ってろ、この年増」
「……またお仕置きされたいんですか？」
礼拝堂に殺気が舞う。
いつもなら気圧されている場面だが、この時ばかりはちがった。すべての武装を取り去ったアリシアとなら互角に戦える自信があった。単なる詠唱魔法の応酬であれば、問題なく対処できることは前回で確認済みだ。
利き手をすぐに動かせるよう軽く曲げて、エーテルは身構える。同格の魔法士が相手の場合、魔法詠唱は後出しが有利なので、下手には

動けない。そのはずだが、アリシアの手が持ち上げられた。どういうわけか後手は譲ってくれたようだ。どんな魔法を使われても対処するべく、アリシアの挙動に全神経を集中させる。
戦端は開かれた。
――かに思われた。その時、低い音がして、礼拝堂の空気が変わった。音の鳴った方から夜気が流れ込んできて、足もとを冷たく吹き抜けていった。

「エーテル！」

名前を呼んだのは青年の声だった。予期せぬ展開に、エーテルは不覚にも胸が熱くなるのを感じていた。
「エミル君⁉」
駆け寄ってくるエミルに、ためらいながらも数歩歩みよる。先ほどとはまったく別種の緊張に襲われる。見れば、彼の額には汗が浮いている……町中を走り回ったのだろうか。
「……ど、どうして来たの？」
「す、少しでも、君の助けになりたいから」
「……そんなの勝手よ」
エーテルは目をしばたたかせ、ぶっきらぼうに顔を背けた。辺りが暗かったことは幸運だった。そうでなければ、赤くなった顔を見られてしまっていたからだ。
「そうだね。君の誘いを断っておいて、僕は自分勝手だ……我が儘だって承知の上だ……けど、それでも君の力になりたいんだ」
エミルが後ろめたげに微笑んでいる。エーテルの心にわずかにあった怒りは、瞬く間に霧（きり）と消えたていた。
「今朝の男の子ですね？」
蚊帳の外にいたアリシアが口を開いた。
エミルは頷いてから、エーテルの前へと進み出た。
「アリシアさん、お願いします。彼女を行かせてあげてください」
「駄目です――と言ったら？」

「ここで僕が、あなたを止めます！」
アリシアのまなざしが一瞬だけ鋭くなった。銀色の殺気の矛先が変わる。
「はあ……部外者は下がっていなさい。君ごとき秒殺できますよ。時間稼ぎになんてならない、目障りなだけです」
地を這う虫に向けるように冷たい目だ。アリシアのこんな表情は、付き合いの長いエーテルでさえ見たことがない。それでもエミルは譲らなかった。
「――エーテルッ！」
「は、はいっ」
力強い声で名前を呼ばれ、肩が跳ねる。
「今のうちに行くんだ！」
温厚な彼からは想像もつかない、有無を言わさない迫力があった。だが、一度だけこちらを振り返ると、空元気じみた笑顔を見せてくれた。心配させないよう気遣ってくれたのだろう。
エーテルはおそるおそる歩きだす。祭壇の隣にある扉に行きたいのだが、身廊（しんろう）にはアリシアがいて、そのすぐ横を通らなければ祭壇へは辿り着けない。易々と通してくれるはずがない。
当然、アリシアの手がエーテルに伸びる。だが――
「何もするな！　あなたの相手は僕だ！」
後ろから雄叫びが上がった。
「フゥ……厄介ですねぇ」
アリシアが鋭く前方を睨みつける。視線の向く先は、信じがたいことにエーテルではなかった。エミルなど歯牙にもかけずに、こちらに襲いかかってくるとばかり思っていた。まさかの展開だ。
間近まで来ても、見向きもしない。このまま通り過ぎてしまえば……。
「手加減はしませんよ。無責任な男は嫌いですから」
隣から、棘のある声が発せられた。明らかに、それはエーテルに宛てた言葉だった。そして、これに返す言葉は、考える間もなく口から出ている。

「アリシアッ！　彼に怪我をさせたら許さないから！」
「は、はあ？　いや……多少の怪我は」
「許さない！　いいわねっ!?」
そう言い捨てて、エーテルは走りだした。